
デジモントランスフォーマーズ

台風X号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモントランスフォーマーズ

【Nコード】

N6470N

【作者名】

台風X号

【あらすじ】

デジモンが変形し、トランスフォーマーは進化をする。

第一話 オールスパークが落ちてきた（前書き）

凄いコラボ誕生！

第一話 オールスパークが落ちてきた

数々の危機から何度も助かっているデジタルワールドだが、最大の異変がついに訪れてしまった。

デジタルワールドに宝石のような雨が降り始めた。

それは、オールスパークである。

オールスパークとは、触れた有機物なら何でもトランスフォーマーにする装置型宝石である。

デジモントランスフォーマーズ

現実世界では、流星大次は、とても暇そうな表情を見せていた。

「なんだが、今日は良いことが起こる予感がしないぜ。」

「おい、大次。」

「げっ、山梨！」

やまなしきつか
山梨鬼束と大次は、仲のいいコンビである。

「野球でもしようぜ。」

「いいね、俺も行くよ。」

大次が家を留守にした直後、机に何かが現れた。

その頃、デジタルワールドでは……………

ギガドラモンとメガドラモンの頭にオールスパークが乗り、そして・
・・・・

「こ、これは……ウワァー!!」

ギガドラモンとメガドラモンは身体が光りそして、2体の何かに変わった。

「この姿は、一体なんだ？」

「ギガドラモン様、その姿は一体？」

「お前もその姿なのか？」

彼等は、自らの名前を変えた。

「わしの名は、メガトロモンだ。」

「なら俺は、スタースクリームモンだぜ！」

共に完全体のデジモンであり、彼等は、仲間を探すべく、デジタルワールドのエリアの一部を破壊しながら、移動を始めた。

このことは、コンボモンと言うデジモンが知っていた。

「これは、大変だぜ！」

コンボモンとマグナスモンは、ぶつかつた。

「いたたた、おいっちゃんと前見て歩けよ！」

「マグナスモン、あれを見てわからないのか！」

マグナスモンは、愕然とした。

「何だよ、あれは……」

ある場所では、テラーコンデジモンと戦っているサイバトロンがいた。

「行くぞ、ジェットモン。」

「おおっ！」

デジモントランスフォーマーズ

「遂にはじまったね、デジモントランスフォーマーズ！」

谷江利彦^{だにえりひこ}は、デジヴァイスにエネルギーカードを一枚差しこんだ。

「evolution」

「ジェットモン進化、ジェットスカイモン！」

テラーコンデジモンの中には、メガザラックモンがいた。

「テラーコンデジモン共、かかれ！」

「ジェットスカイモン、デジタルトランスフォーム！乗ってくれ江利彦。」

「うん。」

「一気呵成に飛ばすぜー！ジェットキャノンGo！」

時速200キロメートルのスピードで駆け抜けて、アクロバット飛行をした。

「降りてくれ、江利彦。」

「なかなか慣れにくいな。」

「ジェットスカイモン、デジタルトランスフォーム！」

テラーコンデジモンが一気に襲いかかってきた。

「俺のとおっておきだー！ジェットミサイルボンバー！」

テラーコンデジモンが全滅した。

メガザラックモンは何処かへと行ってしまった。

ジェットスカイモンは、ジェットモンに戻った。

「メガザラックモンに逃げられましたね。」

「でも、分かったよ。デストロンが攻めてくるならその危険性をす

でに把握していったほうがいいってね。」

「江利彦の言うとおりだよ。ハハハハハハ」

大次と鬼束は、自分の机に何かが乗っていることに気がついた。

「何だろうこれは？」

次回予告

「デジタルワールドについて3人のメンバーが揃った！」

「だけど、ここからがデストロンとの戦いになる。」

「デジタルワールドはトランスフォーマー型デジモン達の戦場と化すよ。」

「次回、デジモントランスフォーマーズ第二話勇者コンボグレイモン！」

「凄いことになりそうだねー！」

第一話 オールスパークが落ちてきた（後書き）

次回もまた見てね。

第二話 勇者コンボグレイモン！

大次と鬼束は、机にあるデジヴァイスを見た。

「何だろうこれは？」

その時、此の二人と一人をデジタルワールドへ誘い始めた。

デジモントランスフォーマーズ

OPテーマ 超えた光と暗黒の陣

走れ無限大の可能性を持つ戦士たちよトランスフォーマー

息が合わないなんて言わないでほしい

自らの心を正義色に染めて

立ち上がるうぜ

G o f i g h t 進化の道を

G o d a s h 音速超えて

戦えー

トランスフォーマー邪悪な野望を打ち砕いて

さあ究極の進化を導いて

トランスフォーマー未来の種を植えて立ち上がれ！

何処までも続く世界を

守り抜け！

「何だここは？」

「大次、この場所なんか変じゃないか？」

「確かに。」

「貴方達もこの場所に来たの？」

「君は誰だい？」

「私は、放生左利。君たちこそ名前言ったら？」

「俺は、流星大次。」「俺は、山梨鬼束だ。」

「君達も、この謎の道具を持っているの？」

「そうだけど？」

その時、ジェット機が3人のいる近くに止まった。

「君達は、そのデジヴァイスを持っていることは、近くにサイバトロンがいることだな。」

「誰だ、お前は！」

「僕は、谷江利彦。」

「そして、デジタルトランスフォーム！ジェットモン！それに此処はデジタルワールドだぜ！」

次々と、軽トラやバイクが現れた。

「デジタルトランスフォーム！コンボモン！」

「デジタルトランスフォーム！マグナスモン！」

「デジタルトランスフォーム！バスターモン！」

三体のデジモンは、三人の少年少女と行動とりたいと宣言した。

「いいぜ！これから俺たちはサイバトロンの戦士だ！」

「デジモントランスフォーマーズ、かなり面白いぜ！」

「メガトロモンだ！よろしくデジモントランスフォーマーズ。」

メガザラックモンは、メガトロモンに体罰を受けていた。

「愚か者が、テラーコンデジモンを全滅させられるとは生意気にもほどがあるわ！」

「しかし、彼の力を見くびった私にせきになんがあるのでしょうか？」

「そうだ！」

メガザラックモンの代わりに、スノーストームモンが行くことにした。

「おい、テラーコンデジモン共、サイバトロンの奴ら増えているがぶっ飛ばせ！」

ジェットモンは、叫んだ。

「早く逃げろー!」

みんなは、テラーコンデジモンに囲まれてしまった。

流星大次は、土をエネルギーに変えた。

「行くよ、コンボモン。」

「此処は行くしかないようだ!」

流星大次は、エネルギーカード1枚をデジヴァイスに差し込んだ。

「evolution」

「コンボモン進化、コンボグレイモン!」

スノーストームモンは、コンボグレイモンに向かって攻撃をした。

「喰らえエネルギースノーミサイル!」

コンボグレイモンは、軽やかに避けた。

「何、避けただと!」

「コマンドーフレーム!」

「ぎゃー!」

スノーストームモンは吹き飛ばされてしまった。

テラーコンデジモンは、またしても全滅した。

「凄いぜコンボモン！」

「えっ、そうか？」

「そっだよ！」

メガトロモンは、スノーストームモンにあることを言った。

「お前も、そんなことでやられたなら、次はショックウェーブモン
お前が行け！」

「了解しました。メガトロモン様！」

EDテーマ まっすぐに行こうぜ！

もろい心はいつも泣いている
自分の弱さを強さに変えるまで
たとえ命朽ち様とも決意したけど
まっすぐに行きたいただそれだけで
自らが強くなれる気がする
雲を見て誰がどう思うの？
楽しさと悲しみのある世界だから
もっと強くなるうトランスフォーマー
悪をぶち破れトランスフォーマー

次回予告

「マグナスモン進化よ。」

「よっしゃ、此の俺が遂に進化するぜ！」

「バスターモンの出番はもう少し後になるな。」

「そう言われているぞ！」

「鬼束、蹴らないでくれよ。」

「次回、デジモントランスフォーマーズ第三話最高だぜ、ウルティマスモン。」

「凄いことになりそうだ！」

第二話 勇者コンボグレイモン！（後書き）

次回もまた見てね。

第三話 最高だぜ、ウルティマスモン！

デジタルワールドに来てから、4日目となった。

流星大次は、傷だらけのデジモンを見つけた。

「あんなところに傷だらけのデジモンがいるよ。」

大次は、みんなに知らせた。

コンボモンは、見覚えがあった。

「君は、フライトモンだね？」

「コンボモンか。」

どうやら、サイバトロンのエンブレムがあった。

「ショックウェーブモンに隙を突かれやられた。」

コンボモンはびっくりした表情でフライトモンを覗いていた。

ショックウェーブモン完全体必殺技「グレートバレルリーフ」

フライトモンは、あちらこちらに散らばった仲間を4体見つけたいと言って、サイバトロと一緒に同行を開始した。

それを恐竜型のテラーコンデジモンが見ていた。

メガザラックモンとアイアンとレッドモンは、スタースクリームモンの行動を監視していた。

「メガトロモン様の言うことより俺のやり方のほうがいいんだ。」

カブトムシ型のテラーコンデジモンを何処かに送り込んでいた。

「あいつ、デジタルワールドの港の方に送り込んだぞ！」

「ヤバいぞ！あそこには、サイバトロンの一人がいるんだぞ！」

デジモントランスフォーマーズ

デジモントランスフォーマーズ

大次達は、ショックウェーブモンとご対面になっていた。

「お前等、サイバトロンの共に要はない。グレートバレルリーフ！」

サイバトロンは避けた。

左利の手にエネルギーカードがあった。

「マグナスモン行くよ。」

「よしっ！」

「evolution」

「マグナスモン進化、ウルティマスモン！」

ウルティマスモンは、自分の姿を見た。

「すげえー、俺も良い姿になったぜ！」

「所詮、成熟期の状態だ。バレルデスヒート！」

ウルティマスモンはうまく避けた。

「喰らえ、ウルトラモンズーン！」

ショックウェーブモンは、素早いスピードでよけてしまった。

「なにっ！」

次回予告

「これはいきなりピンチだ。」

「此処は、ジェットモンとコンボモンとウルティマスモンのチームワークだぜ！」

「僕を忘れていませんか？」

「バスターモンいたのか……」

「次回、デジモントランスフォーマーズ第四話集結成熟期サイバトロン。」

「凄いことになりそうだ！」

第三話 最高だぜ、ウルティマスモン！（後書き）

次回もまた見てね

第四話 集結！成熟期サイバトロン

「なにっ！」

ショックウェーブモンは、軽々とよけた。

「あの巨体で避けるとは。いやらしい奴だな。」

怒りながらコンボモンはそう言った。

「ダンプオールミサイル！」

ショックウェーブモンの攻撃は、サイバトロン全員を吹き飛ばした。

「くそー、あいつ強すぎる。」

「ショックウェーブモン、デジタルトランスフォーム！」

ショックウェーブモンは、戦艦に変形した。

「コンボモン、こうなったら進化だ。」

「よし、やってやるよ。」

「EVOLUTION」

「コンボモン進化、コンボグレイモン！」

「行くぞ、コマンダーフレイム！」

ショックウェーブモンは、またしても避けてしまった。

「こいつ、素早すぎる。」

江利彦は言った。

「ジェットモン、お前も進化して奴を止めろ！」

「了解！」

「EVOLUTION」

「ジェットモン進化、ジェットスカイモン！」

「ハイスピードレーザー！」

「避ける！」

しかし、ショックウェーブモンは避けた。

「わかったぞ。ショックウェーブモンに命令している奴が、あそこにいる！」

大次は、草村の中にデジモンがいることをみんなに知らせた。

「あんなところにいたのか。」

「どつりで、変な動きをしていたんだな。」

イジエクタモン成熟期必殺技「マイクロ破」

「そのデジモンは、俺に任せろ！鬼束頼むぜ！」

「分かったぜバスターモン！」

「EVOLUTION」

「バスターモン進化、ランドマインモン！」

「覚悟しろ！ブラスタークエイク！」

イジエクタモンは、よけようとしたが揺れが原因で身動きが取れなかった。

ショックウェーブモンは、ランドマインモンを撃とうとしていた。

「させるか、ソニックスピードミサイル！」

ジェットスカイモンの攻撃に翻弄されているショックウェーブモンは、隙だらけになっていた。

「ウルティマスモン！」

「よし、ウルトラモンスーン！」

ショックウェーブモンはよけきれずに攻撃を受けて吹き飛ばされてしまった。

残すは、イジエクタモンのみである。

「ジェネラルバースト！」

「マインネットシュート！」

イジェクタモンに向かって、二つの攻撃が襲った。

「うぎゃーーーー！」

イジェクタモンは、悲鳴をあげて消滅した。

デジデストロン戦士を一体倒したことでデジタルワールドを救うことが出来るカギを手に入れた。

「この鍵は、何かに使えるのかな？」

「一応、とっておこうぜ！」

一方、デジデストロンでは

メガトロモンがショックウェーブモンに制裁を加えていた。

次回予告

「スタースクリームモンって誰？」

「よくわからないけど、とんでもない奴だよ。」

「不思議な奴なんだけど、僕たちの敵だ。」

「次回、デジモントランスフォーマーズ第五話小さい島に」

「すごいことになりそうだ。」

第四話 集結！成熟期サイバトロン（後書き）

次回もまた見てね！

第五話 小さい島に（前書き）

小さい島にあったデジサイバトロンの伝説。

第五話 小さい島に

前回までのあらすじ

ショックウェーブモンに苦戦を強いられていたデジサイバトロンの者たち。

しかし、からくりを見つけることで形勢が逆転。

ショックウェーブモンは、吹き飛ばされて、からくりの原因を作ったイジエクタモンを見事に倒したのであった。

大次は、コンボモンの変形した軽トラの荷物乗せの台の上に乗った。

「大次、なんでそこに座るの？」

「此処に乗ったほうが空気がたっぷり吸えるから。」

「フライトモン、本当にこの方向で正しいの？」

左利が聞いた。

「此処で正しい。僕はここを通った時にショックウェーブモンに襲われたから。」

鬼束は、何かを気にしていた。

「デジテストロンの二人がこの先を守っているのには、何か理由があるに違いない。」

バスターモンが、ボケかませに言った。

「小さい島は、デジストロンの基地^{しち}だったりしてな。痛っ！蹴るなよ鬼束！」

「お前が、変なダジャレを言うからだよ。バスターモン。」

「君たちは、そういう下らないことに喧嘩してんじゃないのよ！」

左利は、鬼束とバスターモンに言った。

「よし、着いたぞ。」

フライトモンは、そう言った。

大次は、その島に行く橋を見つけた。

「あそこから、行こう。」

スタースクリームモンとスクラップメタルモンとマイクロモンズとフレンジーモンは、デジサイバトロンの後を追いかけていた。

「やばいぜ、スタースクリームモンの旦那。デジサイバトロンの奴らが俺達の拘束しているデジモン達が狙われる。どうしますか？」

スクラップメタルモン 完全体 必殺技「ミードン・クラッシャー」

マイクロモンズ 成長期 リードマンモン 完全体 必殺技「ミクロデスカッター」

フレンジーモン 成熟期 必殺技「アースクエイクフェスティバル」

デジサイバトロン達は、拘束されているデジモン達の特徴性を見た。

「此処にいるデジモン達、全員、成長期じゃないか。」

「ああ、ひでえー事しやがるぜ。デジタルトランスフォーム！コンボモン。」

デジサイバトロン達は、頭上を見上げた。

「まずい、デジデストロンだ！」

「しかも、厄介な数ほどいる。」

スタースクリームモンは、にやりとしながらビーム砲を向けた。

「ナルビームヘル！」

成長期のデジモン達が、襲われた。

「こいつ、卑怯だぞ。」

「アースクエイクフェスティバル！」

地震により、デジサイバトロン達は、身動きが取れなかった。

「ジェットモン行くぞ！」

「おー江利彦！」

「EVOLUTION」

「ジェットモン進化、ジェットスカイモン！」

「クロードウィンド！」

フレンジーモンは、吹き飛ばされて湖に落ちた。

「今のうちに、行くぞバスターモン。」「よっしゃ自分の出番到来。」

「EVOLUTION」

「バスターモン進化、ランドマインモン！」

「トワイライトバースト！」

スクラップメタルモンに命中したが、完全体ということもあるのかあまり効かなかった。

「痒いぞその攻撃。ミードン・クラッシャー！」

空気を吸い込んで放つ、攻撃はデジサイバトロンの島から追い出した。

「くっ、コンボモン。」「大次、分かったぜ！」

「EVOLUTION」

「コンボモン進化、コンボグレイモン！」

「コマンダーフレイム！」

マイクロモンズにコマンダーフレイムが命中した。

次回予告

「ついに、ついに来るぞ！」

「何がだよ。コンボモン。」

「バスターモンには、分からないことだよ。」

「何だと、自分にも気になる事を。」

「言いたいけど、次回わかるよ。」

「次回、デジモントランスフォーマーズ第六話リンクアップ進化発動！コンボグレイモンフライトモード！」

「すごいことになりそうだ。」

第五話 小さい島に（後書き）

次回もまた見てね！

第六話 リンクアップ進化発動！コンボグレイモンフライトモード！（前書き）

合体進化が発動！デジテストロンの脅威となるのか？

第六話 リンクアップ進化発動！コンボグレイモンフライトモード！

マイクロモンズにコマンダーフレイムが命中した。

「やった。命中したぞ！」

左利が、指をさした。

「あの状況で、進化している。」

「これは、進化ではない。合体だ！」

リードマンモン 完全体 必殺技「マイクロデスカッター」

「食らえ、マイクロデスカッター！」

コンボグレイモン達は、大次達に言った。

「俺達の中にいれば安心だ。デジタルトランスフォーム！」

大次達は、コンボグレイモン達の中に入った。

マイクロデスカッターが襲いかかってきた。

「これのどこが、安全なのよー！」

音がすごいので、左利にとって怖い経験になった。

地面に着地したデジサイバトロンは、反撃の準備を整えた。

「行くぜ！」

「おう！コマンダーフレイム！」

リードマンモンは、コマンダーフレイムをよけた。

コマンダーフレイムは、フレンジーモンに当たった。

「なんで、俺になるんだー！」

そう言いながら、フレンジーモンは消滅した。

フライトモンは、大次に言った。

「俺とコンボグレイモンをリンクアップさせてくれ！」

デジヴァイスが輝いていた。

「LINK UP EVOLUTION」

「コンボグレイモン！」「フライトモン！」「リンクアップ！コンボグレイモンフライトモード！」

「お前も合体できるとは、たいしたできそこないのデジサイバトロんだな。」

リードマンモンは、挑発していた。

「まっ、二人ごと消してやる。ミクロデスカッター！」

コンボグレイモンフライトモードは、物凄い速さでミクロデスカッターを避けまくった。

「なにっ！この俺の攻撃を避けるだと！マイクロサウザンド！」

この攻撃も素早くよけられてしまった。

「なんとこの速さなんだ。」

コンボグレイモンフライトモードの早さは、スタースクリームモンも参戦するも飛ばされてしまった。

「コマンダーアクセル！」

音速並みの速度で、リードマンモンを翻弄させた。

「くっ、この俺が負ける。」

「終わりだ。トルネードジェネラル・フルスロットル！」

リードマンモンは、そのエネルギー波をもろに受けた。

「デジテストロンは、永遠に不滅だー！」

リードマンモンは、その言葉を吐いた後、消滅した。

「リンクオフ！」

コンボグレイモンは、コンボモンに退化した。

ほかのデジサイバトロンも成長期に戻った。

フライトモンの力を目の当たりにしたスタースクリームモンとスクラップメタルモンは、その場を立ち去った。

フライトモンだけは、成熟期だが、デジサイバトロンにとってなくてはならない存在となった。

デジサイバトロン達は、もう一回島に入った。

一方、デジテストロンでは・・・

「メガトロモン様、どうしますか。」

「スタースクリームモンも倒しづらい敵ということは、わしの出番かもな。」

次回予告

「地下の神殿に何かがある。」

「こんな暗闇じゃ見えないな。」

「デジサイバトロンが拘束されている。」

「次回、デジモントランスフォーマーズ第七話地上のスピード王マッハアラートモン」

「すごいことになりそうだ。」

第六話 リンクアップ進化発動！コンボゲレイモンフライトモード！（後書き）

次回もまた見てね！

第七話 地上のスピード王マツハアライトモン（前書き）

神殿にも更にデジサイバトロンの存在があった。しかし、テラーコンデジモンの集団に・・・

第七話 地上のスピード王マツハアライトモン

大次は、デジヴァイスが光り続けていることに疑問を思った。

「デジヴァイスが光っていることは、もしかして。」

「デジサイバトロンの仲間がいることになる。」

コンボモンとマグナスモンとバスターモンとフライトモンは喜んで
いた。

「新しい仲間が増えるって嬉しい。」

「嬉しくて、お祭り騒ぎになるぜ!」

鬼束は、不吉な予感をしたのでそのことを話した。

「お祭り騒ぎになるのはいいが、重要なことを忘れてないか。」

「何だよ、鬼束。お祭りムードを壊さないでよ。」

「畏だと考えて置かないとまずいかもしれないぜ。デジテストロン
が此処を支配していたということは、此処には、残党が残っている
可能性があるというわけだよ。」

大次と左利と江利彦は、確かにと思った。

デジサイバトロン一行は、フライトモン達を先頭に神殿の中に入っ
て行った。

「神殿の中って結構、寒いわね。」

左利は言った。

マグナスモンは、何かを見つけた。

「あそこに、囚われているデジモンがいる。」

テラーコンデジモンの集団が、デジサイバトロンの周りを囲んでいた。

「かなりの警備だ。どうするの？」

デジテストロンの一員がいた。

大次は、データを見た。

「マツハアライトモン。完全体。必殺技は、フィールドキリイングハリケーン。」

「そんなに強いのに、何で捕まっているんだよ。」

テラーコンデジモン集団は、ある者の名前を呼んだ。

「警備は、順調であります。メガトロモン様。」

「メガトロモン・・・貴様・・・」

「お前は、俺の手でデータごと破壊してやる。」

「やめろー!」

大次達は、メガトロモンの恐怖を知らない。

「デジサイバトロン、進化だ。」

「よっしゃー!」

「EVOLUTION」

「コンボモン進化、コンボグレイモン!」

「マグナスモン進化、ウルティマスモン!」

「ジェットモン進化、ジェットスカイモン!」

「バスターモン進化、ランドマインモン!」

メガトロモンは、笑っていた。

「何がおかしい。」

「雑魚が此の墓場に集うとはな。キルドソード!」

コンボグレイモン達は、避けた。

「何だよかなり早いぞ。」

「フライトモン、コンボグレイモンとリンクアップだ。」

「分かったよ！」

「LINK UP EVOLUTION」

「コンボグレイモン」「フライトモン」「リンクアップ！コンボグレイモンフライトモード！」

メガトロモンは、コンボグレイモンフライトモードに氣を取られてしまった。

「何だあの速さは。」

「行け！ウルティマスモン。」

「ウルトラモンズーン！」

「ぐわああああ」

メガトロモンは、神殿の外まで吹き飛ばされた。

「デジタルトランスフォーム！」

メガトロモンは、退却した。

「おのれ、よくもメガトロモン様に無礼な行動を許さん。」

「良いぜ。相手してやる。グレードアースクエイク！」

地震で身動きを封じた。

「クロードウィンド！」

ジェットスカイモンがテラーコンデジモンの5分の1を削った。

「ウルトラハンドバレル！」

殴りまくってテラーコンデジモンを削るウルティマスモン。

「トワイライトバースト！」

テラーコンデジモンを一斉殲滅したランドマインモンは喜んでいた。

「すごいぞ自分。」

「トルネードジェネラル・フルスロットル！」

コンボグレイモンフライトモードは、テラーコンデジモンを全滅させた。

「リンクオフ！」

フライトモンは、マッハライトモンの鎖を破壊した。

「ありがとう。フライトモン。」

「デジサイバトロンのみんなだよ。君を助けたのは。」

「そうか、君達、デジサイバトロなんだ。」

成長期に戻ったコンボモン達は、マツハアライトモンから衝撃の事実を知った。

「あの、メガトロモン。究極体のデジモンを何体も倒しているの！」

「そうなんだ。完全体なんだが、究極体デジモンすら恐怖に慄くほど手ごわいといわれている。ただし、ロイヤルナイツや七大魔王はその力を見下しているらしい。しかし、デジテストロンの中に七大魔王の一人が過大評価しているらしい。」

次回予告

「島から出て次の冒険を始めよう。」

「しばらくしたら、何かにぎやかな街があるよ。」

「しかし、そこにデジテストロンが現れた。」

「この街を破壊させるわけには行かない。」

「次回、デジモントランスフォーマーズ第八話音波野郎と破壊光線野郎、サウンドウェーブモン&レーザーウェーブモンを止めろ！」

「すごいことになりそうだ。」

第七話 地上のスピード王マツハアライトモン（後書き）

次回もまた見てね！

台風X号のデジモンシリーズ第二弾が満を持して登場？

詳しくは、3月23日の特別小説を確認。

第八話 音波野郎と破壊光線野郎、サウンドウェーブモンとレーザーウェーブモ

デジデストロンの二人が動き始める。

第八話 音波野郎と破壊光線野郎、サウンドウェーブモンとレーザーウェーブモ

デジサイバトロンは、島から出た。

「マッハアライトモンが、連れ去られたとき、どこにいたの？」

大次が、マッハアライトモンに問いかけた。

「そうだな、綺麗好きのデジモン達が集まる街でデジデストロンに不意を突かれて、気がついたら島にいたな。」

マッハアライトモンは、変形して、4WDに変形した。

「コンボモン達も変形してその街を行こうよ。」

「おおー！」

コンボモン達は、綺麗好きのデジモン達の集まる街にやってきた。

「本当にきれいな街だ。」

「本当だわ。綺麗ね。」

「残念ながら、この街は、デジデストロンに汚されてしまいました。」

大次達は、マリンエンジェモンを見ていた。

「この街は、マリンの付くデジモン達がきれいにしないとイケない

掟があるのです。しかし、デジデストロンが私達の仲間をほとんど殺してしまったせいで、わずか30体しか残っていません。」

江利彦は、怒った。

「ひどいことをしやがる。デジデストロンは、成長期のデジモン達にも容赦がなかった。しかも此のきれいな街にまで襲うとは、卑劣かつ最低な集団だな許せない！」

「江利彦、俺も許せないぜ！デジタルワールドからデジデストロンを追い出してやる！」

「どうか、お願いします。デジサイバトロンの皆様方、我々の町を救ってください。」

マリンデビモンの依頼をデジサイバトロンは了解した瞬間……

「キリングレーザー！」

依頼をしていたマリンデビモンが目の前で殺された。

レーザーウェーブモン 完全体 必殺技「キリングレーザー」

サウンドウェーブモン 完全体 必殺技「テラサウンド・デリート」

大次と鬼束と左利と江利彦は、デジヴァイスにエネルギーカードを差し込んだ。

「EVOLUTION」

「コンボモン進化、コンボグレイモン！」

「マグナスモン進化、ウルティマスモン！」

「ジェットモン進化、ジェットスカイモン！」

「バスターモン進化、ランドマインモン！」

デジサイバトロンは、レーザーウェーブモン達に攻撃をした。

「ジェネラルカッター！」

「ウルトラモンスーン！」

「スピードカッターサイクル！」

「トワイライトバースト！」

続いて、フライトモンとマッハアライトモンも攻撃した。

「フライスピード！」

「プライドフルキャノン！」

デジサイバトロン達は、やったと思った。

「残念でした。俺達は痛くもかゆくもありません。殺れ！サウンドウェーブモン！」

「そつおんがらすたー
騒音悔羅廃」

マリエンジェモンがデジサイバトロンをかばった後、消滅した。

「LINK UP EVOLUTION」

「ジェットスカイモン！」「マツハアライトモン！」「リンクアップ！ジェットスカイモンマツハアライトモード！」

次回予告

「リンクアップしたぞ！」

「デジサイバトロンの中でも、地上の最速戦士になったね。」

「デジデストロンをぶっ飛ばそう！」

「次回、デジモントランスフォーマーズ第九話合体進化と完全体進化。」

「すごいことになりそうだ！」

第八話 音波野郎と破壊光線野郎、サウンドウェーブモンとレーザーザーウェーブモ

次回もまた見てね！

第二弾降臨は4月予定。新たな伝説を目撃せよ！

第九話 合体進化と完全体進化（前書き）

デジデストロンの二人を倒すことができるのか？

第九話 合体進化と完全体進化

ジェットスカイモンとマツハアライトモンは、リンクアップした。

「行くぞ、ジェットスカイモンマツハアライトモード！」

「おう！」

レーザーウェーブモンとサウンドウェーブモンはデジサイバトロンの周りを軽快なステップで見下していた。

「俺の攻撃を食らえ！騒音悔羅廃！」

ジェットスカイモンマツハアライトモードは、瞬時に避けた。

「次は、こっちだ！マッドシャッフルハリケーン！」

サウンドウェーブモンは、吹き飛ばされた。

「あーれー、行け、ジャガーコマンドヘキサモンとコンドルコマンドヘキサモン。」

サウンドウェーブモンは、建物を破壊した後、コンボグレイモンに近付いてきた。

「ジェネラルストーム！」

サウンドウェーブモンは、避けた。

左利に、コンドルコマンドヘキサモンとジャガーコマンドヘキサモンが近づいていた。

「来ないでよ。ウルティマスモン助けて。」

「任しとけ、マグナストーム！」

コンドルコマンドヘキサモン達を追い払ったウルティマスモン。

「ウルティマスモン、フライトモンとリンクアップして。」

「分かったぜ！」

「LINK UP EVOLUTION」

「ウルティマスモン！」「フライトモン！」「リンクアップ！ウルティマスモンフライトモード！」

ウルティマスモンフライトモード、コンボグレイモンフライトモード同様、成熟期。完全体デジモンが50体来ても、余裕で戦いが繰り広げられる。必殺技は、ウルトラ・インパクト。

「私は、ジャガーコマンドヘキサモンの2体を倒すわ。」

「音速で行くぜ！ウルトラ・インパクト！」

「ぐわあああ！」「ほあああああああ！」

ジャガーコマンドヘキサモンとコンドルコマンドヘキサモンは、消滅した。

しかし、テラーコンデジモン集団が現れた。

「なにっ！」

ブレイクダウモンとバザードモンが参戦してきた。

ブレイクダウモン 完全体 必殺技「ブレードスラッシュ」

バザードモン 完全体 必殺技「キリイング・ミュージック」

大次は、此の絶望的な状況に弱音を吐きそうになった。

「コンボグレイモン、進化できるか。」

「何だ急に。」

「デジヴァイスにもう一枚、エネルギーカードを差し込む。」

大次は、テラーコンデジモンの攻撃を避けて、更には、テラーコンデジモンを踏み台にした。

「屋根の一部を切り取る。」

大次は、デジヴァイスに搭載されているレーザーで、屋根をカード状に切り取った。

「よしっ、コンボグレイモン行くよ！」

「ああ、やってやるぜ大次！」

「POWER SET EVOLUTION」

「コンボグレイモン進化！ファイアーコンボモン！」

ファイアーコンボモン 完全体。コンボグレイモンが進化した姿。梯子から出るレーザー光線による必殺技「プライムデストロイヤー」は、悪を倒す。

レーザーウェーブモンとバザードモンとサウンドウェーブモンは、ファイアーコンボモンに襲いかかった。

「キリングレーザー！」

「ブレードスマッシュ！」

「殺戮音波大衝撃！」

ファイアーコンボモンは、三つの技を梯子の部分で止めた。

「何だと、俺達の技を止めるとは。」

ブレークダウモンは、見物しに来ていただけである。

ファイアーコンボモンは、梯子にたまっているエネルギーをテラーコンデジモンに受け流した。

「サンキュー、ファイアーコンボモン。」

「ああ」

バザードモンは、怒ってファイアーコンボモンに攻撃しかけた。

「ダークバードアタック！」

「プライムデストロイヤー！」

バザードモンは、攻撃を受けて、消滅した。

レーザーウェーブモンとサウンドウェーブモンは、梯子を押さえた。

「くっ・・・」

「これなら攻撃できまい。」

「スピードフルキャノン！」

「ウルトラ・インパクト！」

二体の攻撃が、レーザーウェーブモンとサウンドウェーブモンに命中した。

「あの二人を忘れていた。」

ランドマインモンは、残りのテラーコンデジモンを倒していた。

その時、ブレークダウモンを見た。

「何だあいつは。」

鬼束が言った。

「おい、よそ見をするな！」

「すまん、トワイライトバースト！」

テラーコンデジモンが、やっと全滅した。

レーザーウェーブモンとサウンドウェーブモンは、ファイアーコンボモンに立ち向かおうとしていた。

「聖剣プライムフォース！」

梯子が剣に変形して、レーザーウェーブモン達を真つ二つにした。

「メガトロモン様、万歳ー！」

レーザーウェーブモン達は消滅した。

3体の持つ、鍵が新たなデジサイバトロンの位置を示していた。

「新しい、デジサイバトロンを求めて、次の場所へ行こう！」

「ああ、そこなくては。」

「デジタルトランスフォーム！」

デジサイバトロンは、デジタルワールドの中でも、暑苦しい場所へ向かった。

ブレークダウモンは、メガトロモンの命令で調査していたようだ。

「メガトロモン様。話の腰を折ってすみませんが・・・」

「何だ、ブレークダウモン。報告なら早く済ませてくれ。」

「デジサイバトロンの者達、どんどん強くなっております。どうしますか、このままでは、デジデストロンの死活問題になりかねません。」

「そうか、分かった。九大魔將軍の諸君、此の事で何か対策をとっているようだな。」

超神將軍オーバーロードモン 究極体。必殺技「オーバーメテオ」

怪魚將軍キングポセイドモン 究極体。必殺技「ロストリミックス・キル」

野獸將軍ブレダキングモン 究極体。必殺技「破壊という名の獣の囁き」

技術將軍デバスタモン 究極体。必殺技「テクニクデリート」

情報將軍メナゾールモン 究極体。必殺技「無礼の刃乗」

火炎將軍レッドティカスモン 究極体。必殺技「マグマフォース・ダイレクト」

恐竜將軍ダイナザウラーモン 究極体。必殺技「ダイノフォリア」

妖獣將軍オボミナスモン 究極体。必殺技「恐怖の幻転殺破」

暗黒將軍ブラックザラックモン 究極体。必殺技「ブラックワールド・ビックバン」

此の九代將軍は、七大魔王に匹敵する力を持つ。

メガトロモンと手を組んだ理由はわからない。

これは何かやばそうな気配がしてきた。

次回予告

「暑いよ・・・」

「水が飲みたい。」

「この場所はすでにある邪悪なデジモンによって、支配されているせいでより暑くなっています。」

「新しいデジサイバトロンが教えてくれたと思ったなら何だあれば！」

「次回、デジモントランスフォーマーズ第十話脅威！メナゾールモンの配下。」

「すごいことになりそうだ。」

第九話 合体進化と完全体進化（後書き）

次回もまた見てね。

九代將軍は、トランスフォーマーZから取り入れました。ネタばれですが、ベルゼブモンは、オーバーロードモンに。ベルフェモンは、オボミナスモンに倒されています。

第十話 脅威！メナソールモンの配下（前書き）

ついにデジテストロンの組織構造が少しずつ明らかになっていく。

第十話 脅威！メナゾールモンの配下

デジテストロンは、謎の会議を行っていた。

「デジサイバトロンが強くなっているけど、我々にはどうでもいいこと。」

メナゾールモンの配下は、フォースカイドルスモン（完全体）、サウンドブラスタモン（完全体）、スラストモン（アーマー体）、デッドエンドモン（完全体）、ワイルドライダーモン（成熟期）、ドラッグストライプモン（成熟期）、ブレークダウモン（完全体）、モーターマスタモン（究極体）、ウェザーブレイクモン（完全体）、インフォメーションダークグレイモン（完全体）と大勢いる。

とくに、この会議に出席していないデジモンがいた。

スラストモンである。

デジタルワールドで一番砂漠化が激しくなっている場所があった。

デジサイバトロンは、砂埃を避けまくっていた。

「それにしても、砂漠って暑いと思ったけど・・・ここの砂漠、妙に寒いな。」

「夜でもないのに。」

スラストモンが、デジサイバトロンを目撃した。

「此の俺様が、砂嵐を起こしてやるぜ。」

スラストモン アーマー体 必殺技「臨場痛感嵐」

「臨場痛感嵐！」

バスターモンが見た。

「何だ、でっかい砂嵐だな！」

「砂嵐？みんな逃げろ！」

デジサイバトロンは、右によけようとしたが、砂嵐に巻き込まれてしまった。

コンボモン達は、デジタルトランスフォームをしていた。

「大丈夫か、大次？」

「ああ、大丈夫だよ。」

ほかのみんなも無事だが、砂嵐に巻き込まれたことにより、目的地が分からなくなっていた。

「しかもここはどこ？」

6体と4人は、囚われの身となっていた。

「ここから出せ！」

メナゾールモンの配下の一人である、ウェザーブレイクモンとスラストモンが笑っていた。

「ここから出そうなんて、嫌だね。デジサイバトロンは死ぬまでそこにいな。ハハハハハハハハ」

左利とマグナスモンは、牢屋の壁の一部を切り取った。

「江利彦くん、これを。」

「エネルギーカード2枚もあつてどうするんだよ。」

「大次くんがエネルギーカード二枚、デジヴァイスにセットしたとき、進化したのよ。」

「つまり、俺達もそれができるのか。」

「俺にはくれないのか?」

鬼束が言った。

「鬼束、あんたにもついているでしょ!デジヴァイスにある機能。」

「ほんとだ。全然気が付きもなかったよ。」

フライトモンとマツハアライトモンは、いい案を思いついた。

「俺達が、此の鉄格子を壊す。君達は、先に逃げてくれ。」

「テラーコンデジモンが襲ってくるかもしれないぜ。」

「その時は、俺達で食い止める。」

「分かった。」

マッハアライトモンとフライトモンは、鉄格子を壊した。

「予想通り、テラーコンが来たぞ。」

「デジタルトランスフォーム！」

コンボモン達は、大次達を乗せて、外へ出た。

「脱出しただと！」

大次と江利彦と左利は、エネルゴンカードを二枚差し込んだ。

「POWER SET EVOLUTION」

「コンボモン進化、ファイアーコンボモン！」

「ジェットモン進化、スカイファイアモン！」

「マグナスモン進化、ウルトラマグナスモン！」

鬼束は、エネルゴンカードを一枚差し込んだ。

「EVOLUTION」

「バスターモン進化、ランドマインモン！」

ウェザーブレイクモンとスラストモンは、攻撃をし始めた。

「天氣の狂氣：元凶！」

「臨場痛感嵐！」

三体の完全体デジモンと一体の成熟期デジモンは避けた。

「トワイライトバースト！」

ランドマインモンの攻撃は、スラストモンにかすった。

「こんな攻撃弱いぜ！」

「作戦通りだぜ！」

「なに？」

スラストモンとウェザーブレイクモンは、上を見た。

「畏か！」

「聖剣プライムフォース！」

「ウルトラゲリラハリケーン！」

「スピードオブクラッシュャー！」

3体の攻撃が合体して、スラストモン達を襲った。

「無念！」

「メナゾールモン殿とメガトロモン様万歳！」

スラストモンとウェザーブレイクモンは、消滅した。

マツハアライトモン達がやってきた。

「この場所、昔は緑のあふれる場所だったんだ。しかし、ウェザーブレイクモンがこの場所の気候を変動させたせいで、砂漠化しちゃったんだ。」

デジサイバトロン達は、次の場所に移動し始めた。

デジデストロンで、二人の死を見たメナゾールモンは激怒していた。

「何という不覚だ。奴らが完全体のデジモンまで進化するだけでなく、いずれ究極体になる可能性があるぞ！どうするんだメガトロモン様！」

スタースクリームモンは、メナゾールモンを殴った。

「おまえ、仲間を失ったからって激怒してメガトロモン様に牙をむくような発言はやめたまえ！」

スノーストームモンとアイアントレッドモンは、デジサイバトロンより先にある場所にいた。

「よっ、ブラーモン元気か。」

次回予告

「スノーストームモン達を発見！」

「どうも穢臭いような気がしてきたぞ。」

「今度は、怪物みたいなデジモンが出てきたぞ！」

「次回、デジモントランスフォーマーズ第十一話いきなり究極体出現！オボミナスモン」

「すごいことになりそうだ！」

第十話 脅威！メナソールモンの配下（後書き）

次回もまた見てね。シーズン1は、15話目で終了です。

第十一話 いきなり究極体出現！オボミナスモン

そこは、デジテストロンのヴィーコンデジモンが、いろんなデジモンを奴隷にしていた。

「おいっ働きやがれ、デジテストロンの利益のために働け！」

グラデイモンは、ヴィーコンデジモンに言った。

「罰を与えないで、休んだらすぐに・・・」

「休むな！アックスブルガー！」

グラデイモンは、容赦もなく殺されてしまった。

デジサイバトロンの一人、ブラーモンも奴隷になっていた。

そのほかにも、クロックモン、グロットモン、クリアアグモン、ギンリュウモンなどが奴隷としてひどい扱いを受けていた。

デジサイバトロンの一人、ブラーモンのSOS信号を元に駆けつけていた。

江利彦達は、コンボモン達から降りた。

「デジモン達が・・・」

「奴隷にされているのかよ。」

「許せないぜ！なあ大次。」

「ああ、許せはしない。デジデストロンのヴィーコン軍団を一気につぶすぞ。」

「おおっ！」

「EVOLUTION」

「コンボモン進化、コンボグレイモン。」

「マグナスモン進化、ウルティマスモン。」

「ジェットモン進化、ジェットスカイモン。」

「バスターモン進化、ランドマインモン。」

「LINK UP EVOLUTION」

「コンボグレイモン！」「フライトモン。」「リンクアップ！コンボグレイモンフライトモード！」

「ウルティマスモン！」「マツハアラートモン。」「リンクアップ！ウルティマスモンマツアラートモード！」

二体の合体デジモンと2体の成熟期が、ヴィーコンデジモン集団に攻め入った。

「アックスブルガー！」

「コマンダーフレイムミサイル！」

「ウルトラインパクト！」

「ジェットミサイル！」

「ホットボムバスター！」

アックスブルガーを相殺させずに、ヴィーコンデジモン達に蹴散らしていた。

「ブラーモン、ジェットスカイモンとリンクアップだ。」

「わかった。」

「LINK UP EVOLUTION」

「ジェットスカイモン。」「ブラーモン。」「リンクアップ！ジェットスカイモンブラーモード」

「行け！ジェットスカイモンブラーモード！」

「スピーディミサイルズ！」

無数に放たれたミサイルがヴィーコンデジモンを一気に倒した。

「助かったよ。デジサイバトロン。」

しかし、喜びもつかの間だった。

「妖怪の大鎌！」

町の半分が滅亡した。

「私の下級戦士共を、良くもやりやがったな。」

オボミナスモン 究極体 必殺技「恐怖の幻転殺破」

「究極体！」

「このままだと勝てないぞ。」

「一か八かやってみないと分からないだろ！トワイライトバースト！」

オボミナスモンはびくともしなかった。

「痒いぞ。馬鹿にするな！テストラン！」

デジサイバトロン達は、一気に吹き飛ばされた。

「くっ、なんていうパワーなんだ。」

オボミナスモンの配下の一人、キュウキモンがやってきた。

「オボミナスモン殿、戦艦らしきものがこちらに。」

「なにっ！」

「デジタルトランスフォーム！フォートレスモン。」

フォートレスモン 成熟期 必殺技「クラシックオブレーザーテン
ション」

「戦艦も姿を変えろ！」

「フォートレスモンの頭と胴体が合体した。」

「フォートレスモンマキシマスモード！」

フォートレスモンマキシマスモード 究極体 必殺技「マスターソ
ードプライムスピリット」

「ほお、俺の仲間蹴散らされたのか。」

「これでお前もおしまいだ。オボミナスモン！」

次回予告

「オボミナスモンとフォートレスモンが戦う。」

「ひえええええ！究極体同士の争いだ。」

「スノーストームモン達を見つけ！」

「やばっ、見つかったぜ！」

「次回、デジモントランスフォーメーズ第十二話フォーレスモンVS
オボミナスモン」

「これはすごいことになりそうだ。」

第十一話 いきなり究極体出現！オボミナスモン（後書き）

次回もまた見てね！

第十二話 フォートレスモンVSオボミナスモン

オボミナスモンは、たくらみを考えた。

「キュウキモン、デジサイバトロンの共を頼む。俺は、フォートレスモンを殺る。」

スノーストームモンとアイアントレッドモンは隠れていた。

「あんな奴らに任しとけばいいんだよ。」

「俺達の出る幕じゃないな。」

コンボグレイモンフライトモードは、アイアントレッドモンを見つけた。

「見つけたぞ！」

「ブレイドツイスター！」

キュウキモンの技がコンボグレイモンフライトモードに命中した。

「ウルティマスモンマッハアライトモード、キュウキモンを押さえ
て。」

「分かった。」

キュウキモンは、ウルティマスモンマッハアライトモードのスピードを誘導するかのように行動していた。

「ジェットスカイモンブラーモード、分離。」

「POWER SET EVOLUTION」

「ジェットスカイモン進化！スカイファイアモン！」

「左利」「なーに江利彦さん。」「キュウキモンは、ウルティマスを誘導している。俺がここを崩せば、うまくいく。」

「ウルティマスモンマツハアライトモード、言ったん逃げて！」

「分かった左利。」

「あと少しだったのに。」

キュウキモンの背後にスカイファイアモンがいた。

「スピードオブクラッシュャー！」

「なにっ！ぎゃああああああ」

キュウキモンは消滅した。

ランドマインモンは、スノーストームモンとアイアントレッドモンを追いかけた。

「アイスビーム！」「アイアンハイドレッドミサイル！」

「くっ・・・鬼束。俺も完全体になる。」

「ああ、それを望んでいたんだぜ。行くぜランドマインモン。」

「POWER SET EVOLUTION」

「ランドマインモン進化！ロードバスターモン！」

アイアントレッドモンとスノーstormモンは、ロードバスターモンを見た。

「俺たちやばいじゃ……」

「スパイラルフレアキャノン！」

渦を描くミサイル一発がアイアントレッドモンとスノーstormモンの手前に落下し、二体を巻き込んだ。

「あーれーキーン。青空を見上げたら、僕達のことを思い出してね。」

フォートレスモンとオボミナスモンは、にらみ合っていた。

「恐怖の幻転殺破！」

フォートレスモンに命中して、フォートレスモンを倒れるが……

「オボミナスモン、御前の力を封じさせてもらった。」

「なに！いつの間に……はっ！」

「マスターソードプライムスピリット！」

「ぐわあああああああああ！」

オボミナスモン消滅。

ヘッドモードになった。フォートレスモンは、デジサイバトロンと握手を交わした後、戦艦の上に乗し、旅立っていった。

一方、別の場所では……

「ジンライモン貴様……」

ボロボロになっているデジデストロンの二人組。

「悪いが君達には、滅んでもらう。デジタルワールドの未来のために。コマンディカルメガパンチ！」

デジデストロンのデジコードを吸い上げているジンライモン。

ジンライモン ハイブリット体 必殺技「コマンディカルメガパンチ」

ジンライモンは、一人の少年ジャック・ジャンバルに変わった。

「そろそろ、合流時かな？」

次回予告

「鏡だらけのこの場所。」

「先が進めにくいから怖いよ。」

「左利ちゃん。僕が守って・・・痛っ！」

「鏡に当たってやんの。ハハハハハハ」

「笑うなバスターモン。」

「次回デジモントランスフォーマーズ第十二話鏡を使ったトリック、
暴けリフレクタモン」

「これはすごいことになりそうだ。」

第十二話 フォートレスモンVSオボミナスモン（後書き）

次回もまた見てね！

ジンライモンのことで、少し解説を。正確には、デジプリテンダーデジモン。「指揮官」「静寂」「管理」のデジサイバトロンのスピリット、「破壊」「殺戮」「鬼」のデジデストロンのスピリットがあります。唐突に超神マスターフォースの設定を採用してみません。後、デジモンフロンティアも・・・

なんだかんだで、感想お願いします。

第十三話 鏡を使ったトリック、暴けリフレクタモン

デジサイバトロン達は、鏡の道についた。

「鏡だらけの道か。」

コンボモンは少し戸惑いながら言った。

「ねえ、大次。」

「どうしたんだコンボモン。」

「鏡の迷路って俺、ちょっと怖いんだよ。」

「大丈夫だよ。デジヴァイスに出口を探す機能があるから。」

デジサイバトロン達は、鏡の道の中に入った。

しかしこれは、デジデストロンが仕組んだ厄介な作戦である。

「彼等を鏡の道の中に入れる作戦成功。」

リフレクタモン 成熟期 必殺技「ミラーシャッター」

リフレクタモンの罠に引っ掛かっているとは知らないデジサイバトロン達は、鏡の道の中で迷っていた。

「デジヴァイスが、出口を表示しない。」

「なぜだよ。」

「コンボモン、鏡を一個壊してみたら。」

「ああ、大次。危ないから伏せてくれ。」

「わかった。」

「セトリングアタック！」

一枚の巨大な鏡が割れた。

「大丈夫かコンボモン。」

「ああ、少しワイパーの部分が壊れただけだ。」

大次はデジヴァイスを見た。

「これは、デジデストロン。まさか罠か！」

リフレクタモンは、ワインを飲みながらくつろいでいた。

「ああー、メガトロモン様に此の事を伝えるだけだから少し楽にできる。」

「極楽だぜ。イエー！」

デジサイバトロン達が、鏡を割ってやってきた。

「貴様等。」
「どうして出れた。」

「鏡を一枚割れば、お前達の反応で分かったんだよ。」

「小癪なことを。ミラーシャッター！」

シャッター音と同時にデジサイバトロンの近くに巨大な鏡が出てきた。

「鏡を押し倒して、串刺しにしてやる。」

「そうはさせない。」

「EVOLUTION」

「コンボモン進化！コンボグレイモン！」

「ジェットモン進化！ジェットスカイモン！」

「バスターモン進化！ランドマインモン！」

鏡は、三体のデジサイバトロンの逆に押し倒された。

「くっ、俺達の攻撃を。」

「コマンダーフレーム！」

「ジェットヴァイ！」

「トワイライトバースト！」

リフレクタモンに技が命中し、リフレクタモンは消滅した。

リフレクタモン消滅後、鏡も消滅した。

デジサイバトロン達は、次の町へ目指した。

一方、デジデストロンの一人、スタースクリームモンはデビモン達の住む町にいた。

「強制リンクアップ！」

「やめろー！」

「助けてくれー！」

「吸収される！」

デビモン達の叫びは、スタースクリームモンに取り込まれた時には消えていた。

スタースクリームモンデビモン集団吸収体 完全体 必殺技「デスアーテクスクロウ」

「これで、デジデストロンのリーダーが俺になる。」

それを見ていたピコデビモンとインプモン達は、デジサイバトロンの来ることを待ち望んでいた。

「どうか、来てください。デジサイバトロン・・・」

スタースクリームモンデビモン集団吸収体は、ジャックに遭遇した。

「スタースクリームモンか。」

次回予告

「別の場所で戦いが始まっているね。」

「俺達は、ごつごつとした岩だらけの町にやってきたけどなんかいやな予感が。」

「火炎將軍の命令でやってきただと。」

「しかも強すぎる。」

「次回デジモントランスフォーメース第十四話人間界から来たもの。」

「これはすごいことになりそうだ。」

第十三話 鏡を使ったトリック、暴けリフレクタモン（後書き）

次回もまた見てね。

第十四話 人間界から来たもの

スタースクリームモンデビモン集団吸収体は、ジャックと遭遇した。

「貴様、デジサイバトロンの臭いがする。」

「そうだ。それがどうした？」

「お前を倒す。ナルビームデスク！」

ジャックは、宙返りしてナルビームデスクをよけた。

「プリテンダービーストエヴォリューション！ゴットチータスモン
！」

ゴットチータスモン ハイブリット体 必殺技「ギガコンボフルバ
ースト」

スタースクリームモンは、ゴットチータスモンに攻撃をしたが瞬時
によけるその速さに驚かされた。

「デスアーテクスクロウ！」

両腕にある鋭い爪がゴットチータスモンに襲い掛かる。

「超神烈熱拳連打！」

「なにっ！」

ゴットチータスモンの目にも止まらぬ速さでパンチし続けた。

「くっ、これならどうだ。デスバーストインテクス！」

その攻撃は、ゴットチータスモンを吹き飛ばした。

「よいいける。んっ？」

「喜んでいられるのも今の内だ！ギガコンボフルバースト！」

スタースクリームモンは、この攻撃に巻き込まれて空高く舞い上げられた。

「ぐわあああああ！」

一方、大次たちがいる方では……

岩だらけの街にやってきた。

「コンボモン。この町もデジデストロンの支配下らしい。」

「大次の言うとおりだ。デジデストロンの勢力がますますわかるようになってきたぜ。」

江利彦は、鬼束に言った。

「例の作戦、実行しようかと考えている。」

「あの作戦なら行けると思う。」

左利とマグナスモンは、二人の会話を？マークで聞いていた。

「みんな、降りてくれ。デジタルトランスフォーム！」

大次達は、青ざめながらよろけているゴーレモンを見つけた。

「大丈夫か。」

「デジデストロンの奴隷になりたくはないから逃げてきた。君たちデジサイバトロンだよな。」

「ああ、そうだけというよりゴーレモン。なんでここにいるんだ？」

「この町は、岩系のデジモンに適している町なんだ。」

その時、テラーコンデジモンがロープでゴーレモンを縛った。

「ぬっ、デジサイバトロン！」

「ここにもいたのか。デジサイバトロンのくそどもが。」

サディストドラモン 完全体 必殺技「キリンググファニー」

サディストドラモンは、爆撃機からロボットに変形した。

「こいつらを殺した後に、俺がたっぷり魂で遊ぶか。」

「させるか。いくぞコンボモン。」

「おうつ！」

「power set evolution」

「コンボモン進化、ファイアーコンボモン！」

サデイドトラモンはファイアーコンボモンを見た。

「雑魚か。キリイングファニー！」

紫色の炎がファイアーコンボモンを襲った。

「力がとられていく・・・」

「まずい、ファイアーコンボモン上手く避ける！」

「どうすればいいんだ。そうかあの口の中にこいつを流し込む！プライムデストロイヤー！」

「なに！ごをああああああ！」

サデイドトラモンは消滅した。

しかし、ゴーレモンは連れ去られてしまった。

大次達は、あることに気が付いた。

「そういえば、デジサイバトロンの別軍が足止めされていると言ったよな。」

「確かに、もしかしたら足止めが大変なことになっているかもしれない。」

「俺たちで助けに行こうぜ！」

「デジタルトランスフォーム！乗ってくれ大次達。」

「わかった。」

デジサイバトロンの別のデジサイバトロンがいた。

次回に続く

次回予告

「デジサイバトロンの別の軍には、あの者たちが。」

「しかもフォースチップが発動されるぞ。」

「なんかやべえことになりそうだぞ。」

「次回、デジモントランスフォーマーズ第十五話フォースチップ発動！放てガイアフォース」

「これはすごいことになりそうだ。」

第十四話 人間界から来たもの（後書き）

次回もまた見てね。

第十五話 フォースチップ発動！放てガイアフォース

別のデジサイバトロンは、ショックウェーブモンに邪魔されていた。

「こいつ、強すぎる。」

「ソニックイングモン、弱音を吐いてどうするのよ。一気にぶつかりなさい。」

「分かった。朗利！ソニックショット！」

ショックウェーブモンは、避けた。

その後ろに、ドリークラッシモンがいた。

ドリークラッシモン 完全体 必殺技「夢壊し・人格崩落」

「ふふふ、ゴツモンズ、アイスモンズ。強制リンクアップ。」

ドリークラッシモン ゴツモンアイスモン吸収体 完全体 必殺技「夢殺し・隕石つぶし」

4人の者達は、デジサイバトロンのメンバーであった。

「朗利、別のデジサイバトロンが来た。」

「いくぞ、コンボモン。」

「おお！」

「power set evolution」

「コンボモン進化、ファイアーコンボモン！」

4人は驚いた。

「完全体にまで進化したのか・・・」

ドリークラッシモンは、ファイアーコンボモンを見た。

「そこまで進化していたって、意味がねえんだよ！夢殺し・流氷破滅！」

氷の破片が、ファイアーコンボモンに刺さった。

「ファイアーコンボモン！」

「大丈夫だ大次。こいつのコントロールを狂わせる。コンボイトライデントリボルバー！」

ドリークラッシモンは、スピードが非常に速かった。

「なぜだ。動きが早すぎる。なにっ！」

「夢殺し・隕石つぶし！」

巨大な隕石が、ファイアーコンボモンに目掛けて飛んできた。

「避ける！」

ファイアーコンボモンは、軽やかに避けた。

その時、チップみたいなものが大次のところに飛んできた。

「これはなんだ？」

ポットモンは、それを見てあることを言った。

「それは、フォースチップですね。」

「まさか、デジヴァイスに差し込めば。」

ファイアーコンボモンは、ドリークラッシモンに吹き飛ばされた。

「よしっ！フォースチップイグニッション！ガイアフォース。」

ファイアーコンボモンは両腕に大地から力を集めて赤い球体を作り出した。

「食らえ、ガイアフォース！」

「夢殺し・隕石つぶし！」

隕石つぶしの技が碎かれた。

「なっ、これは究極体の力、俺では勝てない。」

ガイアフォースを受けたドリークラッシモンは、悲鳴を上げて消滅した。

「やったー！」

4人の名前とデジモンの名前は、以下のとおりである。

かめやまかるろす
亀山駟呂栖、パートナーデジモン、バンクモン

はせがわこび
羽瀬川古尾、パートナーデジモン、ガーシエルモン

はせがわはな
羽瀬川映渡、パートナーデジモン、ポップモン

とうじやん
東条朗利、パートナーデジモン、ソニックモン

これで8名になった。

一方、デジデストロンは……

「メガトロモン様、今回の失敗は……」

「わしの追及ミスだ。レーザーウェーブモン。デジサイバトロンを監視しろ！」

「了解、メガトロモン様！」

新たな力が加わったデジサイバトロン。しかしデジデストロンの動きはどこまでなのかは、まだわからない。

次回予告

「次の街は、江戸時代っぽい街並みだ。」

「ここも、デジデストロンにとられているぞ。」

「忍者トランスフォーマーデジモン、メタルヴァンデモン参上！これより貴方たちの命を奪います。」

「いくよ、ウルトラマグナスモン！フォースチップイグニッション！」

「次回 デジモントランスフォーマーズ第十六話これこそウルトラだ！メガデスのイグニッション」

「これはすごいことになりそうだ。」

第十五話 フォースチップ発動！放てガイアフォース（後書き）

次回もまたみてね！

フォースチップイグニッション挿入歌「イグニッション心を超えて」
進化挿入歌「エネルギー進化」

モードチェンジ挿入歌「スーパージェネラル」

超ジョグレス進化挿入歌「守護神の調べ」The Guardia
n examines」

第十六話 これこそウルトラだ！メガデスのイグニッション

デジデストロンの9大將軍の一人、ブラックザラックモンは部下の一人メタルヴァンデモンを呼び出した。

「ブラックザラックモン殿、私にデジサイバトロンの排除を。」

「お前なら、できるとメガトロモン様も信じている。」

「それならば、私に兵をください。」

「数は、どれくらいだ？」

「テラーコンを1000体、ヴィーコンを1000体です。」

「承知した。其方に派遣しよう。」

「有り難く頂戴いたします。」

一方、デジサイバトロンは……

「江戸時代みたいな街並みだ。」

「綺麗ね。」

ソニックモンは、郎里に言った。

「俺は、興味ないな。」

「あんたが興味なくても私は興味があるのよ！」

「うつ……すまん。」

ほかのみんなは、目が点になっていた。

しかし、奇妙な空気に包まれていた。

「強制リンクアップ！」

メタルヴァンデモンは、イガモンとシュリモンとムシャモンをリンクアップさせた。

「メタルヴァンデモン忍者モード！」

「あっ！」

「デジデストロン！」

メタルヴァンデモン忍者モードは、デジサイバトロンを見た。

「この場所もデジデストロンの支配下になっていたのか。」

「悪いか。これより君たちの命をもらいます。行けテラーコンとヴィーコン！」

デジサイバトロンの8人は、デジヴァイスを掲げた。

「power set evolution」

「コンボモン進化、ファイアーコンボモン！」

「マグナスモン進化、ウルトラマグナスモン！」

「ジェットモン進化、スカイファイアモン！」

「バスターモン進化、ロードバスターモン！」

「evolution」

「バンクモン進化、グラップモン！」

「ガーシエルモン進化、ガードモン！」

「ソニックモン進化、ソニックイングモン！」

「ポップモン進化、ポットモン！」

ウルトラマグナスモンは、メタルヴァンデモンに立ち向かった。

ほかのみんなは、テラーコン達を殲滅していた。

「ウルトラハリケーン！」

メタルヴァンデモンは手裏剣で相殺した。

「ふっ、忍者型のデジモンを吸収して正解だったぜ！」

「なに？」

「ギガヘルストーム！」

「うわぁ！」

「ウルトラマグナスモン！」

郎里は、ソニクイングモンに言った。

「リンクアップ進化よ。」

「link up evolution」

「ソニクイングモン」「フライトモン」「リンクアップ進化！ソニクイングモンフライトモード！」

「プライドバーストアタック！」

音速を超えた攻撃がテラーコン達に襲いかかった。

その時、一つのフォースチップが落ちてきた。

「これは、フォースチップだね。」

メタルヴァンデモンは、ウルトラマグナスモンを殴り続けていた。

「メタルヴァンデモン、このフォースチップを見なさい。」

「なにつ、友情のフォースチップ！」

「フォースチップイグニッション！メガデス！」

ウルトラマグナスモンの胸元に光があふれ出た。

「いくぞ。俺を此処まで殴り続けた罰だ。メガデス！」

放たれた光がメタルヴァンデモンを貫き、近くにいたテラーコン5体も巻き添いを食らった。

「ブラックザラックモン殿、申し訳ございません。」

メタルヴァンデモンとテラーコンは消滅した。

「やったー！」

「すごい。」

デジサイバトロンは、また更に強くなったと思っていた。

一方、別のデジサイバトロンは……

「逃げたか。」

ジャックは、スタースクリームモンの残した謎のデジモン文字を見ていた。

「あいつは、恐ろしいことを企んでいるようだな。」

スタースクリームモンの企んでいることとは一体？

デジデストロンは……

「やはり、デジサイバトロンの行動を読めなかったのか。」

ブラックザラックモンはメガトロモンに通信をとった。

「どうだ。メタルヴァンデモンは？」

「残念ながら敗北しました。」

「しかしこれで分かった。デジサイバトロンの行動力をつまく読めば怖くはないだろう。」

「そうですね。」

ブラックザラックモンは、次の刺客を用意していた。

次回予告

「スタースクリームモンがやってきたよ。」

「メガトロモンを倒す前に、お前等で手合わせしてやる。」

「上等だ。かかってこい！」

「これは、完全体の力。」

「次回、デジモントランスフォーマーズ第十七話ガードモン進化。」

「これはすごいことになりそうだ。」

第十六話 これこそウルトラだ！メガデスのイグニッション（後書き）

次回もまた見てね！

シーズン2 OP 主題歌「気高き勇者になれ！」

シーズン2 ED 主題歌「もう一回、もう一回」

第十七話 ガードモン進化

デジサイバトロンは、別の町に移動することになっていた。

コンボモンとマツハアライトモンは、会話をしていた。

「マツハアライトモンこの先にある街は。」

「どうも空気が暗黒に包まれているぞ。」

デジサイバトロンは、謎の暗黒ガスをよけようとしていたのだがそこから現れたのはスタースクリームモンだった。

「デジサイバトロンのごみどもか。ちょうどいい俺の新たな力の生贄になるがいい。」

「ふざけるな！貴様の生贄になるわけにはいかない！大次！」

「ああ、デジサイバトロンー気に行くぞ！」

「おうっ！」

「evolution」

「バンクモン進化、グラップモン！」

「ガーシエルモン進化、ガードモン！」

「ソニックモン進化、ソニックイングモン！」

「ポップモン進化、ポットモン！」

「power set evolution」

「コンボモン進化、ファイアーコンボモン！」

「マグナスモン進化、ウルトラマグナスモン！」

「ジェットモン進化、スカイファイアモン！」

「バスターモン進化、ロードバスターモン！」

「link up evolution」

「ファイアーコンボモン！マツハアライトモン！リンクアップ進化！ファイアーコンボモンマツハアライトモード！」

「ウルトラマグナスモン！ブラーモン！リンクアップ進化！ウルトラマグナスモンブラーモード！」

「スカイファイアモン！フォートレスモンインフィニティーガン！リンクアップ進化！スカイファイアモンインフィニティーガンモード！」

「ロードバスターモン！フライトモン！リンクアップ進化！ロードバスターモンフライトモード！」

デジサイバトロンの最大攻撃が始まった。

スタースクリームモンは、憤怒のフォースチップを持っていた。

「フォースチップイグニッション！」

「なにっ！」

「フレイムインフェルノ！」

8体のデジサイバトロン達は吹き飛ばされた。

「みんな大丈夫か？」

「くっ、奴もフォースチップを使えるのかよ。」

「ふふふ、俺は更に強くなる檻よ出て来い！」

檻が大地から現れた。

「左にリボルモン、右にグレイドモン。此の二体のデジモンを俺の力にすれば更に強くなる。」

「そんなことはさせない。プライムデストロイヤー！」

スタースクリームモンは、デビモンの翼で体を守った。

「こいつ、すでにリンクアップしているぞ。」

「なにっ！」

「俺は、更にリンクアップする。リボルモン、グレイドモン。強制

リンクアップ！スタースクリームモンフォースマード！」

「アーテックスキャノン、ブレード！」

デジサイバトロンの8体が束になって掛かってきてもスタースクリームモンの敵ではなかった。

「お前達、弱すぎるつまらない一瞬で消してやる！」

「そう簡単に倒されてたまるか！」

古尾のデジヴァイスが光った。

「power set evolution」

「ガードモン進化、ガードシエルモン！」

「ダークネスアーテックスキャノン！」

「ホイルハリケーン！」

二つの技は相殺されて消えた。

「なに！進化しているだと！」

「リンクアップばかりでは、完全に力が入ってこないぞ！」

「黙れ！アーテックスブレード！」

両手で刀を押さえたガードシエルモン。

「黙れのセリフ、こっちのセリフでもある。ビルドマックストルネード！」

「どうああああああ！」

爆発音とともに、歓声が上がった。

「やったー！」

「ありがとな、ガードシエルモン。」

「ああ！」

デジサイバトロン達は、次の町へ急いで移動し始めた。

一方、スタースクリームモンは・・・

「デジサイバトロンの不意打ちは許せん。デジデストロンのリーダーになってデジサイバトロンを皆殺しにしてやる。」

どうやら、メガトロモンを裏切るつもりである。

次回予告

「メガトロモン、貴様を裏切る準備は整っている。」

「愚か者が、ここまで来るとはな。」

「悪いが俺がデジデストロンのリーダーになる。」

「デジデストロンの反乱が俺達にも影響してくるぞ！」

「次回、デジモントランスフォーマーズ第十八話反乱！メガトロモンVSスタースクリームモン。」

「これはすごいことになりそうだ。」

第十七話 ガードモン進化（後書き）

次回もまた見てね！

第十八話 反乱！メガトロモンVSスタースクリームモン

スタースクリームモンは、戦闘機に変形していた。

「メガトロモンを倒すことで俺はすべてを司れる。」

メガトロモンは、部下のデジモンとともに奴隷にしているデジモン達に重労働をさせていた。

「もっと働け！でなければデジタマごとを消滅させてやる！」

スノーストームモンとアイアントレッドモンは、鞭で奴隷デジモンを制裁していた。

デッドリーストームモンとブラックアウトモンは、スタースクリームモンを見つけた。

「デジデストロンの恥さらしが返ってきたぜ。」

「ああ、メガトロモン様にご報告だ。」

「メガトロモン、お前等の後続く。」

「こいつ、俺達を追いかけるつもりか。そうはいくか。」

メガトロモンは、通信を聞き駆けつけた。

「ご苦労。後は地上で活動をしろ！」

「了解しましたメガトロモン様。」

ブラックアウトモン達が地上に降りたことにより、二人になった。

「久しぶりだな。デジデストロンのゴミが。」

「メガトロモン、貴様を倒して奴隷を解放しデジサイバトロンと協力できるデジデストロンを作り出してやる。」

「スタースクリームモン、お前には不可能だ。デジデストロンはわしの支配下だ。」

「フォースチップイグニッション！ダブルインパクト」

「ダブルインパクト！」

「くっ、スタースクリームモン、あそこにいる少女は誰だ。」

「俺は、デジデストロンという観点を捨てる。人間界から来た少女、阿連種あれぐさの説得で、俺の目的が変わった！」

「愚か者が、デッドオーバー！」

スタースクリームモンは、デビモンの翼でガードをした。

「小癪にも程があるぞ！」

「アーテックスブレード！」

メガトロモンを斬りまくるスタースクリームモン。

「メガトロモン様がやられているぞ！」

「どうやら貴様とは。本気で殺り合うしかないようだな。」

「俺は、デジデストロンに革命を起こす！」

「貴様に革命などは起こせない。死ねー！」

阿連種は、フォースチップを挿入した。

「フォースチップイグニッション！ロイヤルセイバー！」

「ロイヤルセイバー！」

「デッド・タイムブラスト！」

二つの技が相殺し、大爆発を生んだ。

「大丈夫か、阿連種？」

「ええ大丈夫よ。」

メガトロモンは、スタースクリームモンとの戦いで引き分けになったことを悔しがっていた。

「デジサイバトロンごと、消してやる。」

次回予告

「この町は、デジデストロンの配下になっていないね。」

「でも、デジデストロンの気配を感じる。」

「おいらの名は、エリートブレイクモン。」

「デジデストロン！」

「次回デジモントランスフォーマーズ第十九話気配を隠す敵、エリートブレイクモン。」

「これはすごいことになりそうだ。」

第十八話 反乱！メガトロモンVSスタースクリームモン（後書き）

次回もまた見てね！

第十九話 気配を隠す敵、エリートブレイクモン

メガトロモンは、企みを変えた。

「8つの將軍よ、デジサイバトロン殲滅のために集まるがいい。」

超神將軍オーバードモン

怪魚將軍キングポセイドモン

野獸將軍ブレダキングモン

技術將軍デバスタモン

情報將軍メナゾールモン

火炎將軍レッドティカスモン

恐竜將軍ダイナザウラーモン

暗黒將軍ブラックザラックモン

8大將軍は、デジデストロン本部に集まった。

「これからは、わしの指揮ではなく、7大魔王のデジモンの一人に任せた。紹介しようルーチェモンフォルダウンモードだ。」

「吾の名は、ルーチェモン。あなた達が8大將軍ですか、一人の將軍がいないことを思えば、デジサイバトロン軍の勢力拡大を何とし

でも阻止すべきだ。いいな！」

「了解！」

一方、デジサイバトロンは・・・

「次の町は、デジデストロンが支配していないね。」

「でも、気配がおかしい。」

デジデストロンのエンプレムがすでに出ていた。

「隠していたのか。」

「その通りだ。大次達デジサイバトロンの諸君。」

「デバスタモン様。」

エリートブレイクモン。

「エリートブレイクモン、こいつ等を尾行してご苦労。さあ、攻撃するのだ。」

「デバスタモンを倒したいけど、エリートブレイクモンの形態が究極体では俺達に勝ち目がない。」

「エリートスポー！」

「大次、地面を切り取って何しているんだよ！まさか、俺は更なる進化を。」

「行くぞーコンボモン！」

「おうっ！」

「ENERGON evolution」

「コンボモン進化！オプティマスプライモン！」

オプティマスプライモン 究極体 必殺技「マトリクスコマンダー
アタック」

「究極進化しただと！」

「コマンダージャスファイアー！」

「ぐわああああ！」

エリートブレイクモンが消滅した。

「次は、お前だデバスタモン！」

「なに、舐めてもらったら困るぞ。クリエイトキル！」

次回予告

「デバスタモン、めちゃくちゃ強いよ！」

「このままでは勝てないどうすれば。」

「私のマグナスモンも究極体になれる！」

「次回、第二十話ゴッドマグナスモン、二体の究極体デジモン誕生！」

「これはすごいことになりそうだ。」

第十九話 気配を隠す敵、エリートブレイクモン（後書き）

次回もまた見てね！

第二十話 ゴッドマグナスモン、二体の究極体デジモン誕生！

「クリエイトキル！」

オプティマスプライモンを攻撃を避けて、次なる行動を見せた。

「デジタルトランスフォーム！」

巨大な戦闘機に変形して、デバスタモンを吹き飛ばした。

「くっ、こいつそんなに俺を怒らせたいのか。」

「私は、デジタルワールドの平和のため、お前に怒涛の鉄拳を食らわしてやる！デジタルトランスフォーム！マトリクスコマンダーアタック！」

しかし、デバスタモンは罠を作っていた。

「何、こいつ等は・・・」

「ふふふ、俺の手下どもだ！」

デバスタモンのもとにいるデジモンは技術に携わる凶悪デジモン。

ブレイクドラモン（究極体）、メガコクワモン（完全体）、プラスカプテリモン（究極体）、マイナスクワガーモン（究極体）、ドライバンスモン（クロス形態）、メカニクルズグラウモン（完全体）、ハッキングデビモン（成熟期）、トラブリットモン（完全体）、シューティングモン（成長期）がデバスタモンの配下デジモンである。

彼等は、成長期21万5千体。成熟期5万5千体。完全体4500体。クロス形態150体。究極体75体いた。

「こんな絶望的じゃないか。究極体に進化したのはいいが。」

大次は焦りを見せていた。

「マジでむかつくぜ！鬼束、自分は完全体になり、マッサアライトモンとリンクアップします。」

「よし、行くぜ！おいつ、大次！加勢してやるぜ！」

「サンキュー鬼束。」

「power set evolution」

「バスターモン進化、ロードバスターモン！」

「link up evolution」

「ロードバスターモン、マッサアライトモン。リンクアップ進化！ロードバスターモンマッサアライトモード！」

「行くぜ！スパイラルマッサフレア！」

シューティングモン達が倒された。

「ふーん、ならば一斉に攻撃態勢に入れ！」

「何だと！」

デバスタモンの配下デジモン達は、一斉にデジサイバトロンに攻撃態勢を向けた。

「このままではやられる。」

ほかのデジサイバトロン達も進化して、どうにかこの苦境を断ち切るうとするも・・・

「グラビディブレス！」「プラスレールガンキャノン！」

「くっ、このままでは倒されてしまう。」

「ソニックイングモン、完全体になれ！」

「ポットモンも、進化だ！」

「ああ！」「任してください。」

「power set evolution」

「ソニックイングモン進化、ウイングセイバーモン！」

「ポットモン進化、ルーツモン！」

「いっけえー！」

「ウィンドエッジ！」「オーパーツハイドレック！」

二人の攻撃が、ドライバンスモン150体を粉碎した。

フォートレスモンは、胴体と合体した。

「フォートレスモンマキシマスモード！マスターソード！」

ウルトラマグナスモンは、ブレイクドラモンの攻撃を受けていた。

左利は、もう一枚のエネルギーカードを持っていた。

「ウルトラマグナスモン！」

「左利、そのエネルギーカードは進化のカード。」

「ENERGON evolution」

「ウルトラマグナスモン進化、ゴッドマグナスモン！」

デバスタモンは驚いた表情をした。

「なに、究極体が三体もいるだと。」

最後のブレイクドラモンをフォートレスモンマキシマスモードのマスターソードで消された。

「残すは、お前一人だ。デバスタモン！」

「くっ、仕方がないまだ秘策を残しているのだ。」

「なに！」

「テクニックデリート！」

デバスタモンのあたりから地面が消えた。

「まさか、隠しがあるのか。」

デジサイバトロン達は、戸惑い始めた。

「何という卑怯な奴。」

「全くだよ。これでは進化した意味がない。」

「その通り、お前等がいくら進化しても俺の敵ではない。さあ、いでよベルフェモンにたくさんオールスパークの欠片を食べさせてトランスフォーマー化させたベルフェモン、すなわちマジンデバステイックモン！」

「ぐるあああああ！」

マジンデバステイックモン 究極体 必殺技「クロー・ファイナル」

「こいつは、七大魔王でも飼いならしやすいデジデストロンの最強兵器なのさ。ハハハハハハ！」

デジサイバトロンにとって不利な立場になったのだが……

「ナルビームヘル！」

「ジンライバーストアタック！」

マジンデバスティックモンが倒れた。

デジサイバトロンは、スタースクリームモンとジンライモンの姿を見た。

「えー、スタースクリームモン！何でデジサイバトロンに加入しているの。」

「俺にも相棒がついたんだ。阿連種だ。」

「よろしくね、みんな。」

「隣にいるのは？」

「ジャックさんよ。デジモンに進化できるの。」

デジサイバトロンに仲間が加わり優勢に近付いた。

次回予告

「なぜだスタースクリームモン。裏切りよったのか。」

「その通りだ！貴様らデジデストロンの悪事に付き合いきれなくなつたからだ！」

「ジンライモン今です。」

「ここは、スタースクリームモンの隠された力を解き放った方がいい

いぞ。」

「えっ？」

「阿連種ちゃん。エネルギーカードを。」

「これで、究極進化よ。スタースクリームモン！」

「次回、第二十一話討て！ナイトスクリームモン、隠された力。」

「これはすごいことになりそうだ。」

第二十話 ゴッドマグナスモン、二体の究極体デジモン誕生！（後書き）

次回もまた見てね！

第二十一話 討て！ナイトスクリームモン、隠された力

デバスタモンは、戸惑っていた。

「なぜだ、スタースクリームモンなぜ裏切りよった。メガトロモン様に抹殺されるのが運命にお前に等しいぞ。」

スタースクリームモンはデバスタモンに喝を入れた。

「メガトロモンの考えていることはデジタルワールドを奴隷世界に変えること。いずれ我々も奴隷化されるということに気がついたのだ。デバスタモン、お前は部下が殺されていく姿を見て無関心だった。つまり、仲間を信用していない！」

スタースクリームモンが明かした真実は、デジサイバトロン全員を驚かした。

「そういうことだったのか。」

オブティマスプライモンは、右拳を強く握り怒りをあらわにしていた。

大次達は、デバスタモンに叫んだ。

「デジデストロンなんか、デジタルワールドを支配されてたまるか！」

デバスタモンはマジンテバステックモンを動かした。

「貴様ら屑共に用はなくなった。デジサイバトロン滅んで死ね！」

「マトリクスフュージョン！」「ゴッドマグナストーム！」「マスタースードブレイク！」

3つの攻撃がマジンデバスティックモンに命中した。

「やったか。」

「ハハハ。マジンデバスティックモンにお前等の雑魚攻撃が通用しない。」

「クロー・ファイナル！」

マジンデバスティックモンの攻撃が襲いかかった。

「みんな大丈夫か。」

オプティマスプライモンがボロボロの姿になっていた。

「オプティマスプライモン！」

「それにゴッドマグナスモン。」

「痛ってーなチクショー。」

ロードバスターモンは、マジンデバスティックモンの行動を見ていた。

「もはやこれまでか。」

スタースクリームモンは、紫の光に包まれていた。

「何だあの光は。」

「阿連種、エネルゴンカードをもう一枚差し込んでくれたのか。」

「ええ、あいつらに邪魔はさせない。大次さん達は、マジンデバス
ティックモンを。」

「分かった。行くぞみんな!」「おう!」

「ENERGON evolution」

「スタースクリームモン進化、ナイトスクリームモン!」

ナイトスクリームモン 究極体 必殺技「アーテックスブレード
グレード」

「スタースクリームモンが進化した。」

「行くわよ。ナイトスクリームモン!」

「ああ!ナルビームヘルサプライズ!」

マジンデバスティックモンの両腕を破壊した。

「なにっ!くっ、テクニックデリート!」

ナイトスクリームモンは、アーテックスキャノンで撃ち返して弾い

た。

オブティマスプライモンとゴッドマグナスモンは、マジンデバステイックモンに向かって必殺技で攻撃した。

「マトリクスメテオ!」「ゴッドマキシマスノヴァ!」

二つの必殺技が一つとなり、マジンデバステイックモンの心臓部を貫通した。

「ぐわああああああ!」

マジンデバステイックモン消滅。

「最後は、お前だデバスタモン。」

「ふっ、最後になるのはナイトスクリームモン、貴様だー!」

「アーテックスブレードグレード!」

「なっ、俺の左腕が真っ二つに。よくもー!なにっ!」

「これで」「これで終わりだ!アーテックスキャノンブラスト!」

強い一撃がデバスタモンの体を粉々にした。

「俺の力が、弱すぎだと……うわああああああ!」

デバスタモン消滅。

デジサイバトロン達は、スタースクリームモンを手厚く歓迎した。

「ようこそ、デジサイバトロンへ。」

コンボモンが手を差し伸べた。

スタースクリームモンはコンボモンの手を握り握手をした。

「こちらこそだ。コンボモン。それとデジサイバトロン。」

大次と阿連種も握手を交わした。

みんなも交わし、そのあと次に支配されている場所へと向かった。

一方、デジデストロンは・・・

「メガトロモン様、デバスタモンが裏切り者に殺されました。」

「なるほどついにデジサイバトロンに落ちたか。」

次回予告

「次の場所は、どうも変だ。」

「ついにデジデストロンの基地に到着だ。」

「でも様子がおかしい。あそこにいるデジモンは何？」

「それに、超神将軍が。」

「次回、第二十二話超神將軍と謎のデジモン、謎に満ちた関係。」

「これはすごいことになりそうだ。」

第二十一話 討て！ナイトスクリームモン、隠された力（後書き）

次回もまた見てね！

第二十二話 超神將軍と謎のデジモン、謎に満ちた関係

スタースクリームモンは、大次達に来てほしい場所があると言った。

「コンボモンも少し興味があると思うのだが、古代の出来事らしい。」

「古代の出来事・・・」

そこは、古代のデジモン達がつづった場所である。

しかし、その一つが破壊されているものを見つけた。

「俺はデジデストロン軍から抜けた後、周りを探しまわっていた。その時に阿連種と出会い彼女のパートナーになった。その直後にこの遺跡洞窟を発見した。しかし既に見つかっていて、此の伝説の石板の一部が壊されていたんだ。犯人はメガトロモンであると確信がついた。」

「どうして確信がついたんだ。」

「壊され方がカノン砲で一発撃った痕跡があったからだ。」

古代デジモン文字を見て、ブラーモンが解読した。

「これはおそらく、プライマスの誓約です。」

「中身には、かつて^{デジタルワールド}で星帝と創造主に似た戦士が戦いその
電脳世界を平和にした。その暗黒なる者は消滅した。だが電脳世界

にあるブラストエネルギーを十三個集め、強き暗黒エネルギーを持つ者が探すと災いが再び起こる。」

ブラーモンは、そのデジモンの名を言った。

「ユニクロモン、デジタルワールドの破壊者。」

大次達は突然、揺れを感じて戸惑った。

「何だ？」

超神將軍オーバーロードモンとダブルフェイスモンが空からの奇襲攻撃をかけて洞窟をふさいだ。

「これではらくは、動けまい。」

「デジサイバトロンもとい、スタースクリームモンの抹殺は、俺に任せてくれ。」

「分かった。ブラッドモンとキャンサーモン、行って始末して来い！」

「了解しました。」

ブラッドモン 完全体 必殺技「ワイルドボールバスター」

キャンサーモン 完全体 必殺技「竜王雷弾墮」

ダブルフェイスモン 完全体 必殺技「デスポイテット」

「閉じ込められたか。」

デジサイバトロンの完全体に進化だ。

「ああ、行くぞ！」

「power set evolution」

「コンボモン進化、ファイアーコンボモン！」

「マグナスモン進化、ウルトラマグナスモン！」

「ジェットモン進化、スカイファイアモン！」

「バスターモン進化、ロードバスターモン！」

「バンクモン進化、レッドアラートモン！」

「ガーシエルモン進化、ガードシエルモン！」

「ソニックモン進化、ウィングセイバーモン！」

「ポップモン進化、ルーツモン！」

「プリテンダーエヴォリュション！ジンライモン！」

これで全員進化したぜ。

スタースクリームモンはファイアーコンボモンと一緒に閉じ込められている岩を破壊した。

「おりゃー！」

「ちっ、外へ出てきやがった！」

ブラッドモンとキャンサーモンは、必殺技で攻撃をした。

「ワイルドボールバスター！」

「竜王雷弾墮！」

「突風迅雷！」

ジンライモンが攻撃をはじめた。

「あいつ！」

「今だ！」

「オーケー、プライムデストロイヤー！」

「ウルトラハリケーンブレイク！」

「ファーストミサイルオールバスター！」

「ショットアウトボンバー！」

「アラジンゲインパクト！」

「ホイールハリケーン！」

「セイバービーム！」

「オーパーツウエーブ！」

「ナルビームヘル！」

「地雷豪霸！」

十個の技のうち八つが何者かにはじかれた。

二つの技は、オーバードモンに命中した。

「ぬるいぬるい。」

「くっ、何だ。」

マーゴンモン 究極体 必殺技「タイフーンビルズキラー」

「なにつ、究極体が・・・」

「いいタイミングに現れてくれたマーゴンモン。」

「こいつ等、どういう関係なんだ。」

その時、のこぎりのような剣を持った。デジモンがキャンサーモンに襲いかかった。

「何だ此の神聖なる力は。」

「私の名は、サントジャパリアモン！東北三県の力が一つになったデジモンだ。」

サントジャパリアモン 聖騎士型 究極体 必殺技「バッドエンドクラッシュャー」

その姿は、下半身が岩手県の形で、上半身が福島県、両腕は宮城県の形をそして左腕には気仙沼市と南三陸町の間には絆のホーリーリングを持つ。武器はのこぎりのような剣「リアスブレード」を持っている。

「サントジャパリアモンだと！神聖なる力は悪の手でつぶしてやる！ブラッドマニアルキャノン！」

サントジャパリアモンは、拳で技を砕いた。

「なっにつ！」

「東北勇気拳！」

サントジャパリアモンの左手の拳がブラッドモンの腹部を貫いた。

「そんな馬鹿な・・・ぎゃあああああ！」

ブラッドモン消滅。

「よくもブラッドモンを。氣象異変龍神仕業撃！」

竜巻で攻撃はしようとするも、剣ではじかれた。

「サンタジャパリアモン、強いぞ！」

「貴様らには、分からぬ。東北の思いが私に眠っているのだ。この思いは破壊はできない。バッドエンドクラッシャー！」

リアスブレードが強く共鳴してそれをキャンサーモンに食らわした。

「なっ、私の体が真つ二つに・・・」

キャンサーモン消滅。

「すごい！」

次回予告

「サンタジャパリアモンかけー！」

「まだまだこれから。私の強さは東北三県の思いと一心同体。」

「そんなもの、我々の敵ではないわー！」

「マーゴンモン、おぬしの力では絆を断つことは出来ぬ。」

「次回、第二十三話仲間の思い、サンタジャパリアモンがくれたものの。」

「行くよスカイファイアモン、ロードハスターモン。究極体に進化だ。」

「これはすごいことになりそうだ。」

第二十二話 超神將軍と謎のデジモン、謎に満ちた関係（後書き）

次回もまた見てね！

皆さんは気がつきませんでしたでしょうか。サントジャパリアモンですが、ロイヤルナイツ候補の一人でもあります。

第二十三話 仲間の思い、サンタジャパリアモンがくれたもの

サンタジャパリアモンは、マーゴンモンに言った。

「デジタルワールドを支配しても無駄である。そうメガトロモンという者に伝えておけ！」

「伝えるわけにはいかない。」

「そうか、東北勇気拳！」

「くっ、タイフーンビルズキラー！」

「どうわわわ！」

「サンタジャパリアモン！」

「私の絆のホーリーリングを触るがよい。ロードバスターモン、スカイファイアモン。」

オーバーロードモンが妨害した。

「ミサイルズヘルキリング！」

「くそー！」

サンタジャパリアモンは怒涛の攻撃を引き起こした。

「邪魔をするなオーバーロードモン！リアスプライドキャリバー！」

リアスブレードから一筋の希望の光が放たれてオーバーロードモンに命中した。

「なにっ！」

サンタジャパリアモンは、マーゴンモンに不覚を取られた。

「お前は、思いの力で勝とうとしているがそんなものは弱い！ダークリミットシヨッキング！」

「サンタジャパリアモン！貴様、離しやがれ！ブラストロード！」

ロードバスターモンは、マーゴンモンを吹き飛ばすが・・・

「スカイファイアモン！」

「こいつでも仕留めれば。」

「くっ、届かない。」

絆のホーリーリングに手を伸ばそうとするスカイファイアモン。

その時、ロードバスターモンがスカイファイアモンの手をつかんだ。

「お前、この技をともに受けて死ぬ気か。」

「そうでもない」と絆のホーリーリングになんて手を伸ばせませんから。」

ロードバスターモンの左手、スカイファイアモンの左腕が絆のホーリーリングをつかんだ。

サンタジャパリアモンは共感した。

「この素晴らしい絆の力。お前達の力を強く染め上げて見せよう。」

江利彦と鬼束のデジヴァイスにエネルギーカードがもう一枚差し込まれていた。

「これは、もしかして進化できるということか。」

「すげえ、行こうぜロードバスターモン。」

「おうっ！」

「戦おう！スカイファイアモン。」

「ついに来たぜ！」

「ENERGON evolution」

「ロードバスターモン進化、ロードキングモン！」

「スカイファイアモン進化、ジェットファイアモン！」

二体の究極体が新たに誕生した。

「まさか、更に究極体が。」

「大次、此処は俺達に任せてくれ。」

「分かった。デジサイバトロンの、ロードキングモンとジェットファイアモン以外は撤退だ!」

「了解!」

「行くぜ相棒!」

「自分も絆の力が満ちていて最高です!」

「行くぜデジタルトランスフォーム!」

「自分が、マーゴンモンの注意を引きます。」

「そのあとを俺が攻撃するっていうことかダブル攻撃で行こうぜ!」

「やりましょう!」

ロードキングモンが、マーゴンモンの注意を引いていた。

「こいつ、逃げるな!」

「逃げなんかねえよ。今だ!」

「よし、ジェットスクランブル!」

「ファイナルスマッシュ!」

二つの攻撃を受けたマーゴンモンは高く空中に舞い消滅した。

オーバーロードモンは、怒りを付けていたがその場を後にした。
ダブルフェイスモンもその場を去った。

そのあと、サンタジャパリアモンは人間界に戻ることにした。

「俺達も、デジタルワールドを支配から救って復興しよう。」

「ああ、そうだ。」

「デジデストロンを滅ぼすため、俺達がいる。」

「勇者の心を解放する時だ！」

「おおー！」

一方デジデストロンでは・・・

オーバーロードモンはイライラしていた。

「ふざけやがって、何が進化だ。そんなので喜んでいいのか。俺は、
ユニクロモン細胞を使って強化して復讐してやる！フッフッフフ。
」

次回予告

「オーバーロードモンとの最終決戦だ。」

「しかし、あいつ再生能力を持っているぞ！」

「くそ、どうやって倒せば。」

「そのことなら私に任してくれ。」

「お前は、ダイアトラスモン。」

「次回、第二十四話破壊と呼ばれた正義、ダイアトラスモン見参！」

「ゾーンブレードカッタービクトリー！」

「これはすごいことになりそうだ。」

第二十三話 仲間の思い、サンタジャパリアモンがくれたもの（後書き）

次回もまた見てね！

ダイアトラスモンと言えば、サイバトロンの破壊大帝ダイアトラスからきています。破壊と呼ばれた正義は、デジトラでも受け継いでいます。ピクシブでデジモントランスフォーマーズとインデックスの選ばれし子供たちとデジモンアドベンチャーと02の選ばれし子供達がもし出会ったらというストーリーを作ろうかなと考えています。

第二十四話 破壊と呼ばれた正義、ダイアトラスモン見参！

デジサイバトロンは、オーバードモンの所へ向かっていた。

「オーバードモン倒そう一刻も早く。」

「そうだな。古尾。」

コンボモン達は、オーバードモンの城を見つけた。

「ここがオーバードモンの城か。」

「ついにやってきたな。」

オーバードモンがヴィーコンデジモンズを連れてやってきた。

「貴様等を倒す。準備はしている。殺れ！」

ヴィーコンデジモンズ達がデジサイバトロンに襲いかかった。

「大次。」

「よしっ、行こう。」「うん。」「ああー！」

「ENERGON evolution」

「コンボモン進化、オプティマスプライモン！」

「マグナスモン進化、ゴッドマグナスモン！」

「ジェットモン進化、ジェットファイアモン！」

「バスターモン進化、ロードキングモン！」

「スタースクリームモン進化、ナイトスクリームモン！」

「行くぞ！」「こちらは完全体だ。」

「power set evolution」

「バンクモン進化、レッドアライトモン！」

「ガーシエルモン進化、ガードシエルモン！」

「ソニックモン進化、ウィングセイバーモン！」

「ポップモン進化、ルーツモン！」

「プリテンダーハイブリットエヴォリション！ジンライモン！」

デジサイバトロンの完全体と成熟期は、ヴィーコンデジモンの排除に向かった。

究極体は、オーバードモンを倒しに行った。

「マトリクスキャノン！」

「ゴッドネスサンダー！」

「ロックオンズスピーディ！」

「ブラストセブンアタック！」

「アーテックスブレードアルファ！」

オーバーロードモンに命中した。

「くっ、しかし俺には再生能力がある。」

「なんだと！」「しまった再生能力があったのか！」

「オーバーハイスピードバースト！」

「うわああああ！」「強すぎるぞ。」

「再生能力をどうにかするしかない。」

「ああ！でもどうすれば。」

オプティマスプライモンはあることを考えた。

「攻撃しまくれば、みんな行くぞ！」

「おうつ！」

「いくぜえええええええ！」

オプティマスプライモン達は攻撃を続けたが、オーバーロードモンが完全消滅はしなかった。

「ははは、お前等の攻撃これではお遊びにしかないな。」

「駄目か。」

「俺のデジコアが城にある限り、俺は復活し続ける。」

「そのコアを壊せば、良いつてということだな。」

「誰だ。お前は。ダイアトラスモン！」

ダイアトラスモン トランスフォーマー型 究極体 必殺技「ゾーンブレードカッタービクトリー」

「まさか、メガトロモン様に殺されたはずでは。」

「殺されたのは私のホログラムだ。」

「ちっ、ごまかし攻撃か。」

「そう言うことだ。城ごとぶっ壊す！ゾーンブレードカッタービクトリー！」

城が丸ごと破壊されて消滅した。

デジコアも一部が欠けた。

「ぎゃああああああ！おのれダイアトラスモン。」

「今だ、オプティマスプライモン達。」

「サンキュー、ダイアトラスモン。これで形勢逆転だ。なっ大上。」

「ああ、ちょうどみんなの分のフォースチップを見つけた。」

「ありがとう。大上。」

「フォースチップイグニッション！アクセルアーム！」

「フォースチップイグニッション！フレアバスター！」

「フォースチップイグニッション！ブイブレスアロー！」

「フォースチップイグニッション！インフェルノゲート！」

「フォースチップイグニッション！ハードロックダマシー！」

オプティマスプライモンの掛け声でそれぞれ攻撃を開始することした。

「邪悪なる炎は我々正義が鎮火させる！ハードロックダマシー！」

「インフェルノゲート！」

「ブイブレスアロー！」

「フレアバスター！」

「アクセルアーム！」

5つのほかのデジモンの技を繰り出したオプティマスプライモン達。
オーバーロードモンは避けることなく、5つの攻撃を受け悲鳴を上げた。

「ぎややややあああああああああ！まさか、此の俺
が負けるとはあああああ！」

オーバーロードモン消滅。

ダイアトラスモンとデジサイバトロン達は握手を交わした。

「君たちに出会えてうれしいよ。」

「いやいや、ダイアトラスモン。デジサイバトロンの中でもタフな
奴とは噂されてたけど。本当だよ。」

「それほどでもないと思う。ハハハハハハ。」

みんなも仲良く笑った。

一方、デジデストロン・・・

「あと六人、キングポセイドモン、ブレダキングモン、メナゾール
モン、レッドティカスモン、ダイナザウラーモン、ブラックザラッ
クモン。これはまずいですメガトロモン様。」

アンティラモンがメガトロモンに報告した。

「分かっている。インダラモン、アンティラモンと一緒にデジサイ

「バトロンを倒してこい。」

「了解しましたメガトロモン様。」

サイクロナスモンは、少し不安を感じていた。

次回予告

「なんだか、いや予感が漂う場所ね。」

「インドラモンとアンティラモンじゃないか。」

「お前達を排除するためにやってきた。」

「やべえ、こいつ強すぎるよ。」

「俺に任せろ！」

「次回第二十五話ジャックの本気、ゴッドジンライモン登場！」

「行くぜ、プリテンダーソウルダブルエヴォリューション！」

「これは、すごいことになりそうだ。」

第二十四話 破壊と呼ばれた正義、ダイアトラスモン見参！（後書き）

次回もまた見てね！

ピクシブにて歌詞ありバージョンの主題歌と挿入歌を用意しました。

第二十五話 ジャックの本気、ゴッドジンライモン登場！

ダイアトラスモンが加わったデジサイバトロン。

デジデストロンの企みとは一体？

そして、今後の展開で明かされるデジタルワールドの新事実。

コンボモンと大次達は、グランドキャニオンのような場所に来ていた。

「すげえー、デジタルワールドにもこんな場所があるんだ。」

「目に焼き付けておきたい場所だぜ。」

「川も流れているわ。」

しかし、デジデストロンの罠がどうやら張り巡らされていることに、デジサイバトロン達は気がつかなかった。

マグナスモンが、川の水を飲もうと瞬間・・・

「ヴィーコンデジモンズだ。」

「デジデストロンの雑兵だぜ！」

「ブラーモン、マッハアライトモン。」

「よし、マッハグレンビーム！」

「春秋蹴光！」

ヴィーコンデジモンズは消滅した。

しかし、更に敵が現れた。

「アドームクハ！」

コンボモン達は、よけに避けた。

「彼等は、完全体デジモンだ。」

「俺達で、アンティラモン達を倒す。」

「待ってくれ。」

「ジャック、どうしたんだ。」

「どうもこれも罠の予感がしてならない。俺がアンティラモン達を倒す。」

「分かった。」

鬼束と古尾は、更にデジストロンの親玉が来ることを見た。

「まずい、メガトロモン達だ。」

「頼んだぞ、ジャック。」

「任しとけ大次。」

メガトロモン達の攻撃が始まろうとしていた。

「ENEGRON evolution」

「コンボモン進化、オプティマスプライモン！」

「マグナスモン進化、ゴッドマグナスモン！」

「ジェットモン進化、ジェットファイアモン！」

「バスターモン進化、ロードバスターモン！」

「スタースクリームモン進化、ナイトスクリームモン！」

「power set evolution」

「バンクモン進化、レッドアラートモン！」

「ガーシエルモン進化、ガードシエルモン！」

「ソニックモン進化、ウイングセイバーモン！」

「ポップモン進化、ルーツモン！」

「プリテンダーソウルダブルエヴォリション！ゴッドジンライモン！」

メガトロモンは、ダブルフェイスモンとノイズメイズモンと共にい

た。

「究極体が5体、完全体が4体。」

「ガスケットモン、俺と融合しろ！」

「誰だ？」

一方、ゴッドジンライモンは・・・

「くっ・・・」

インダラモンとアンティラモンを苦戦させていた。

「これで済むと思っているなよ。」

「どういう意味だそれは。」

「ユニクロモンというお方が来たおかげでこっちは助かるのだよ。」

「ユニクロモン・・・まさか!」

「気がついたか。ならば話が早い。」

「お前等の話に付き合う必要はない。ゴッドフレイングパンチ！」

アンティラモンとインダラモンは吹き飛ばされた。

「ぐわあああああ!」

二体のデジモンは消滅した。

「ユニクロモンってまさか！大次達が危ない！」

「メガトロモン、今日こそ決着をつけよう。」

「我等の新たな仲間を紹介しよう。ユニクロモンだ。」

「ユニクロモン？」

「我は、ユニクロモン。選ばれし子供たちに対しての復讐者である。」

突如現れたユニクロモン。彼が言った選ばれし子供たちに対しての復讐者とは一体どういうことなのか？

次回予告

「我は、ユニクロモン。選ばれし子供たちに対しての復讐者なり。」

「こいつの言っていることがわからねえ。」

「選ばれし子供たちの伝説のことで知っていることがある。」

「ブラーモン教えてくれ。」

「次回、第二十六話ユニクロモンの正体。」

「あいつは滅んだはずじゃ。」

「これはすごいことになりそうだ」

第二十五話 ジャックの本気、ゴッドジンライモン登場！（後書き）

次回もまた見てね！

第二十六話 ユニクロモンの正体

「我は、選ばれし子供たちへの復讐者なり。」

「あいつがユニクロモン。」

「大次、とてつもなく嫌な感覚を持っているぞ。」

「ああ、そのようだ。」

ユニクロモンは、本体の姿で現れた。

「強大な選ばれた力を消してやる。デジタルトランスフォーム！」

オプティマスプライモン達は、攻撃態勢に入った。

「奴等」「よせつ、スノーストームモン。ユニクロモンの強さを見れば安全だ。」

「メガトロモン様の言うとおりだぜ。」

「ガスケットモン達は、それでいいのか。」

「俺達が高みの見物。」「そうそう、見物。見物。」

スノーストームモンは、嫌な予感しかしていなかった。

「マトリクスキャンン！」

「ゴッドスナールドット！」

「ロードキングファイアー！」

「ファイティンググローミサイル！」

「ヴァーテックスキャノンイプシロン！」

戦車に変形したユニクロモンの体から鎖のような触角が現れた。

その先端から手を広げたようなものが現れた。

「攻撃を謎の物体で打ち消しただと！」

「なにっ！」

デジサイバトロン達は驚愕した。

「まさか、滅んだはずでは。」

「ブラーモン、どうしたんだ？」

古尾が聞いた。

「彼の正体を知っている。」

「奴の正体？」

「ユニクロモンの正体は、アポカリモンの可能性がある。」

「アポカリモン？」

「かつて、君たちと同じ選ばれし子供たちが戦った最悪の敵。人間の負の感情や、進化の過程で消えて言ったデジモン達の怨念が集結した存在。滅んだと聞いたはずなのだが・・・」

「デジタルトランスフォーム！」

ユニクロモンの右手にオールスパークの欠片があった。

「我は、これにデータが触れたことにより転生した。我は本体、しかし別箇がある。それはデジタルワールドにあるものをすべて食いつくすために再び存在できた。」

ユニクロモンは、オールスパークの欠片を手で握り潰して食べた。

「ふっ、オールスパークのおかげで我の体から、全く違う素質のデジモンが作り出せる。」

「こいつ！」

「よせっ！ダイアトラスモン！」

「ゾーンブレードカッタービクトリー！」

ユニクロモンは、触角で攻撃を受け止めた。

「そんな程度か。」

「何だと！」

「喰らえ！オールサンダーデッドリーフューチャー！」

デジサイバトロン達はみんな、雷の攻撃を受けて倒れた。

「くっ・・・」

「こいつ・・・」

スタースクリームモンは、立とうとしても阿連種が言った。

「無茶をしな・・・いで。」

「し・・・かし。」

メガトロモンは部下たちに命令を下した。

「デジサイバトロン達を拘束せよ！」

「くっ・・・そうはさせないわ。」

「俺だって・・・もっと進化させたい。」

「そうだ・・・ここでひるんでいては。」

古尾と郎利と羽渡のデジヴァイスが勝手に動き出して、エネルギーゴンカードを作り出した。

3人がエネルギーゴンカードを差し込んだ。

「ENERGON EVOLUTION」

「ガーシエルモン進化、ガードハイドモン！」

「ソニックモン進化、ソニックボンバーモン！」

「ポップモン進化、ベクタープライモン！」

ガードハイドモン 究極体 必殺技「グランドトゥバースト」

ソニックボンバーモン 究極体 必殺技「ソニックブレード」

ベクタープライモン 究極体 必殺技「時空大剣時停止破」

「なに、究極に進化したと！」

ユニクロモンが焦りを見せ始めた。

「ユニクロモン、ただのはったりだ！」

「カオスフライズキャノン！」

「グランドトゥバースト！」

「ソニックブレード！」

二つの攻撃がユニクロモンを吹き飛ばした。

メガトロモンは攻撃しようとするが・・・

「時空大剣時停止破！」

ベクタープライモンによって時が止まった。

「時空大剣神威乃舞！」

メガトロモンを攻撃を受けて、左腕の半分がデータ消失しかけていた。

「デジテストロン、引き上げるぞ！」

デジサイバトロン達は、安全なところに避難した。

「大次、良かった。」

「コンボモン、3体の究極体に助けてもらったんだ。」

「郎利さん達も究極体に。」

「そうよ。私達だって進化できると信じれば出来るのよ。」

カルロスは、驚いた。

「これって、エネルギーカード。」

「きっと、俺も進化できるよ。」

「そうだな、バンクモン。」

一方デジテストロンは・・・

「生き残った將軍を全員呼び出して一気に攻撃する。」

「メガトロモン様、そんなことをしたら・・・」

「捨て身の作戦だ。」

サイクロナスモンとメガザラックモンは、厄介だと思っていた。

次回予告

「デジモントランスフォーマーズシーズン3突入！」

「いよいよ、戦いも後半戦だな。」

「いや、中盤戦だよ。」

「これからが進化だな。」

「デジサイバトロン軍最高！」「最高！」

「てか次回予告きちんとしてないよね。」

「次回第二十七話熱くなれデジサイバトロン軍。將軍全員を蹴散らせ！」

「バンクモン進化、シグナルライザーモン！」

「これはすごいことになりそうだ。」

第二十六話 ユニクロモンの正体（後書き）

次回もまた見てね！

第二十七話 熱くなれデジサイバトロン軍、將軍全員を蹴散らせ！

メガトロモンが、怒りを爆発させてこう言った。

「残った將軍ども、一気にデジサイバトロンを討て！」

「了解！メガトロモン様！」

ブラックザラックモンとレッドティカスモンは、参謀として作戦を立てた。

一方、デジサイバトロンは……

「コンボモン、デジデストロン軍の奴らが来たよ。」

「大次、サンキュー。俺達の考えはこうだ。大次と江利彦と左利と鬼束で、敵軍をかく乱させて、そのあとを、残りの6人がやって、逃した奴をほかのみんながやるという作戦。そして今回ばかりは、將軍が強いかもしれない。」

ソニックモンは少し心配していた。

「本当に行けるのか？」

「大丈夫よ。ソニックモン、私達だって究極体に進化できるようになったんだから。」

「カルロスも行けるか。」

「うん、ハチャメチャに闘志が燃えているからな。なあバンクモン。」

「ああ、カルロスの言うとおりだよ。」

デジデストロンの将軍がやってきた。

「げっ……6人の将軍が来た。」

「なにっ！」

キングポセイドモン 究極体 必殺技「フォールデスレイン」

ブレダキングモン 究極体 必殺技「ファイアーヘル」

メナゾールモン 究極体 必殺技「グランドデストラクション」

レッドティカスモン 究極体 必殺技「ファイブカノン」

ダイナザウラーモン 究極体 必殺技「テラーオブアタックバースト」

ブラックザラックモン 究極体 必殺技「ミステリアスブラック」

「全部、究極体！」

「きつとてつもなく強いかな。長期戦になるかもしれない大次。」

「ああ。」

「でも、デジサイバトロンの底力をデジデストロンに見せつけるときじゃないの？」

「阿連種の言うとおりだぜ！大次。長期戦なるうが関係ねえ！」

「チームデジサイバロン！いざ出陣！」「おうっ！」

「ENERGON EVOLUTION」

「コンボモン進化、オプティマスプライモン！」

「マグナスモン進化、ゴッドマグナスモン！」

「ジェットモン進化、ジェットファイアモン！」

「バスターモン進化、ロードキングモン！」

「バンクモン進化、シグナルライザーモン！」

「ガーシエルモン進化、ガードハイドモン！」

「ソニックモン進化、ソニックボンバモン！」

「ポップモン進化、ベクタープライモン！」

「スタースクリームモン進化、ナイトスクリームモン！」

「プリテンダーダブルエヴォリション！ゴッドジンライモン！」

「デジサイバトロンのアタック開始だ。マトリクスキャノン！」

「ゴッドハリケーンフルバースト！」

「ファイアーズブレイク！」

「ゴングロックンファイアー！」

「シグナルブランドフォース！」

「ホライズンキャノン！」

「ソニックカイバーストミサイル！」

「時空大剣神威乃舞！」

「ヴァーテックスキャノンイプシロン！」

「イジェクトファイナルメテオ！」

10個の必殺技のほかに、デジサイバトン達も加勢した。

「フライトバスター！」

「マッハスピーン！」

「トルスアイルー！」

「マキシマスファイアインパクト！」

「ゾーンカイザーキリング！」

6人の將軍達は、攻撃をもろ受けた。

「こいつ等、殺れ我が部下共！」

しかし、すべて全滅していた。

「あの攻撃で、部下が全滅だと。」

「これがデジサイバトロン魂だー！」

一旦優勢に思えたデジサイバトロン軍だが・・・

「ミステリアスブラック！」

「前が見えなくなった。」

「この暗闇は、まさか・・・」

「俺の攻撃で滅べ！ダークデスイン！」

「ぎややあああああ！」

「オプティマスプライモン達が・・・」

「このままでは・・・」

大次は、エネルギーカードをもう一枚作った。

「まさか、更に進化を。」

「そうするしかこの危機は、救えないだろ！」

「確かに、そうだな。」

「行くぞ、エネルギーカード差し込み完了。」

「SUPER ENERGY EVOLUTION」

「オプティマスプライモンモードチェンジ！オプティマスプライモンスーパーモード！」

「プライムスプライト！」

「なにっ、俺の攻撃をはじいただと。」

「ブラックザラックモン覚悟しろ！オプティマスクロー！」

ブラックザラックモンの胸部にオプティマスプライモンスーパーモ
ードの爪が貫通した。

「何だと、無念。」

ブラックザラックモン消滅！

次回予告

「スーパーモードかけえええ！」

「6人の將軍なんて一気に倒せそうだ。」

「その前に現れた謎の球体デジモン軍団。」

「あいつらはいったい何者なんだ？」

「次回第二十八話正体不明の球体デジモン襲来、5体の合体勇者デジモン参上！」

「待たせたな。我が名はスペリオモン。」

「これはすごいことになりそうだ。」

第二十七話 熱くなれデジサイバトロノ軍、將軍全員を蹴散らせ！（後書き）

次回もまた見てね！

第二十八話 正体不明の球体デジモン襲来、5体の合体勇者デジモン参上！

ダイナザウラーモンとメナゾールモン、ブレダキングモンはゴッドマグナスモンらを尾行していた。

江利彦の作戦が的中していたようだ。

「よし、ジェットファイアモンのフォーメーションで行くぞ。」

「了解！」

ロードキングモンとゴッドマグナスモンは、ジェットファイアモンの後ろにいた。

「作戦通りに行けるな。」

「来たぞ。」

「よしっ、攻撃開始！」

「ジェットブラスターバースト！」

「クロリングバレイケーン！」

「ロードキングプレス！」

ダイナザウラーモンとメナゾールモンとブレダキングモンは攻撃を受けて消滅した。

残すはレッドティカスモンとキングポセイドモンだけとなった。

「このままではやられる。」

「オプティマスプライモンスーパーモード、いい物くれてやれ！」

「大次、分かった。シータキャノンフルバースト！」

レッドティカスモンにその攻撃が喰らって消滅した。

「まずい、早く逃げなくてはやられる。」

キングポセイドモンは、必死に逃げたが謎の球体デジモンに出会った。

「なんだ？」

「デジタルトランスフォーム！バグモン！」

バグモン、丸いボールのような形状に変形するトランスフォーマー型のデジモン。必殺技は、胸のキャノン砲から放つ「リンチビームデス」

「小さい者たちよ。此处を通せ！」

「誰でもいい。混沌になるものを吸収する。そこのお前が吸収に役立つ。ノイズメイズモン。」

「呼ばれて飛び出て、ジャジャーン！」

ノイズメイズモンは、見たことも無い紋章を見せた。

「貴様裏切るつもりか。」

「俺は、元から貴様等の部下じゃないんでね。」

「なに？ほざけ、裏切り者はすぐに殺す。フォールデスレイン！」

バグモンが、ノイズメイズモンをかばって4割が消滅した。

「何だと！」

「そう言うこと、俺たちつながっているのだよ。サーチミサイルオ
ールビクトリー！」

キングポセイドモンを追尾するミサイルが放たれた。

「たった、6発か。」

しかし、バグモン達もその攻撃をした。

「げっ、まずい・・・ぎゃあああああ！」

キングポセイドモン消滅。

「ユニクロモン様に献上するにふさわしい妬みと恨みが込められて
いる。素晴らしい。傑作だ！アカデミー賞級だ！」

ノイズメイズモンはバグモン達と一緒にどこかへと去った。

それを見ていたのは5体のデジモンであった。

「やはり、アポカリモンのデータが読み取れた。」

「この事をデジサイバトロンのみんなにも。」

「そうだな。早く報告しないとまずい。」

デジサイバトロンの達はデジデストロンの基地を探すために休むことなく探し続けた。

そこに10体のデジモンがいた。

「デジデストロンなら此処にいるぜ。ファイブジョグレス、ビルドロモン！」

「そういうとき。ファイブジョグレス、ブルーティカスモン！」

デジサイバトロンの次なる危機が迫っていた。

そして、ユニクロモンの目的はいったい何なのか？

次回予告

「スペリオモンって何なの？」

「私の名前だ。」

「今回、その5体が登場したよ。」

「そう言うことだ。ファイブジョグレス！」

「次回第二十九話ブルーティカスモンVSスペリオモン。」

「これは、すごいことになりそうだ。」

第二十八話 正体不明の球体デジモン襲来、5体の合体勇者デジモン参上！（後

次回もまた見てね。

第二十九話 ブルーティカスモンVSスベリオモン

デジサイバトロンは、ブルーティカスモンとビルドロモンとにらみ合いをしていた。

「このままでは、にらみ合いが続いてデジデストロンの行動を阻止できない。」

大次は、オプティマスプライモンスーパーモードに指示を送った。

「分かった大次。危険すぎるがやってみる。」

オプティマスプライモンスーパーモードはマツハライトモンと一緒に瞬間移動して、ビルドロモン達の後ろに回った。

「オプティマスクロー！」

「マツハランドキャノン！」

ビルドロモンとブルーティカスモンに攻撃が命中したのだが……

「分離しやがった！」

「ゴッドマグナスモン、一体でも取り押さえて。」

「分かった左利！一体でも多く取り押さえれば。」

しかし、デジデストロンの一人、ショックウェーブモンに妨害を受けた。

「貴様、邪魔をするつもりか。」

「邪魔は、お前だデジサイバトロン!」

ガスケットモンやランドバレットモンまで出撃してきた。

「次から次へと。」

ロードストームモンとノイズメイズモンとメガトロモンが、デジサイバトロンに集中攻撃を仕掛けてきた。

「これでダチがあかない。」

その時、炎に輝くスポーツカーがやってきた。

「デジサイバトロンのみんな、これを使え!」

「ファイブジョグレス装置。」

5機の戦闘機が同時にやってきて、デジデストロンをかく乱させた。

「ファイブジョグレス!」

「スペリオモン!」

スペリオモン 究極体 合成型 必殺技「マキシマムトライデント」

「ホットロデイマスモン、デジタルトランスフォーム!」

ホットロデイマスモン 完全体 トランスフォーマー型 必殺技「
ショットフレイム」

ビルドロモンとブルーティカスモンは、スペリオモンを見ていた。

「一番厄介なのが、デジサイバトロンに入りやがった。」

メガトロモンは、ブレードでオプティマスプライモンスーパーモードに攻撃を仕掛けていた。

「究極体が戸惑っているのは弱いな。」

「それはどうかな。シータキャノンフルバースト!」

メガトロモンが吹き飛ばされた。

ビルドロモンはスペリオモンに襲いかかった。

「マキシマムトライデント!」

「なに!ぎゃあああ!」

ブルーティカスモンがビルドロモンの代わりになった。

「それでも食らえ、ブローガスグランドデス!」

「スペリオルフレイード!」

二つの攻撃は相殺して衝撃波が伝わった。

メガトロモンは、勝負がつかないということを言い始め退却を宣言

した。

ショックウェーブモンは、逆らってデジサイバトロンの攻撃を仕掛けた。

「ショックウェーブモンやめろ！」

「ナイトスクリームモン、裏切りは許さん！」

「ナルビームヘルバースト！」

ショックウェーブモンに命中し、両腕が消滅した。

「ぎゃあああああああ！メガトロモン様助けてくれ！」

「仕方ない。お前を担いで退却する。」

アイアントレッドモンは、最後にこう言い残した。

「この仇は絶対に返してやる！」

デジサイバトロンの新たな仲間が増えて喜ぶ大次達。

「戦いの疲れを癒しに行く場所を探しに行こうよ。」

郎利は、片方の方を触っていた。

「確かに、疲れを取る場所を探さなきゃね。」

ホットロディマスモンは疲れを癒す場所があることを知っていた。

「この近くにピノッキモンが運営している温泉があるんだ。ピノッキモンは俺の親友だし彼から聞きだしたら、デジデストロンにはばれることのないシールドを張っているらしい。ハグルモン達がおもてなしをしてくれるぞ。」

その温泉に全員が向かった。しかし、球体デジモン「バグモン」がその一部始終を聞きとっていた。

一方デジデストロンでは・・・

「ショックウェーブモンが・・・」

「謎の黒い塊になった！」

「どういうことだ。これは・・・」

「転生進化ではないかと思えますメガトロモン様。」

「ノイズメイズモン。なんだその転生進化って。」

「転生進化は、アポカリモン様がユニクロモン様に転生したと同時に進化もするという複雑なプログラム。過去の記憶は一部消えてしまうが、そこに所属していたことは忘れていないのでご安心を。」

次回予告

「温泉だー！」

「しばらくは平和で楽しめる。」

「デジデストロンでは、ショックウェーブモンが転生進化を。」

「俺の名は、ショックフリートモン！俺にかかればデジサイバトロ
ンなんて皆殺しにしてくれる。」

「次回、第三十話バグモンの罠！ピノッキモン最後の決断。」

「今まで、俺の親友にいてくれてありがとなホットロデスマスモン。
」

「これはすごいことになりそうだ。」

第二十九話 ブルーティカスモンVSスペリオモン（後書き）

次回もまた見てね。

第三十話 バグモンの罠！ピノッキモン最後の決断

ショックウェーブモンの声が変わり始めた。

「うわああああ！」

「本当に転生進化なのかよ。消滅とかしたらまずいぜ。」

ガスケットモンとランドバレットモンは心配していた。

「ぐおおおおおお！」

ショックウェーブモンを覆っている黒い塊が消えて姿を現したのは・
・・

「ショックフリートモン！」

ショックフリートモン トランスフォーマー型 究極体 必殺技「
ショックエアケイク」

一方、デジサイバトロンは……

郎利達が目を輝かしていた。

「此処が、俺のと親友ピノッキモンが運営している温泉だ。」

「大次、入ろうよ。」

「そうだなコンボモン。」

温泉に入っている古尾と大次は、あることに気がついた。

「デジテストロンが入らなくて、ゆっくりとしていられる。」

「ホントだぜ、なあコンボモン。」

「ああ、大次の言うとおりだよ。」

ガーシエルモンは、古尾に話しかけた。

「古尾、ハグルモン達がバグモンに狙われていないか。」

「大丈夫だよ。バグモンってこの前の丸い球体。」

「そう、成熟期のデジモンでもあった。」

「ハグルモンは、成長期ってこれはまずい。」

ハグルモン達は、バグモンに出会った。

「誰だ、お前は。」

「デスグリット！」

ハグルモン達が消滅した。

ショックフリートモンがバグモン達と一緒に温泉の場所に来た。

デジサイバトロン達は、温泉から出て広場でくつろいでいた。

ピノッキモンがホットロディマスモンに報告をしに来た。

「大変だ。デジデストロンが攻めてきた。」

「なにつ、ハグルモンは。」

「全滅だ。こうなれば俺が行く。」

「まてっ!」

「今まで俺の親友にいてくれてありがとなホットロディマスモン。」

ピノッキモンは、ショックフリートモンと出会った。

「貴様、絶対に許さん。」

「俺を倒そうなど、100年早い!」

「何!」

「ショックエアクエイク!」

ピノッキモンに命中したがなおもたちあがった。

「此処でくたばるわけにはいかない!ブリットハンマー!」

ショックフリートモンは、攻撃を避けたあと必殺技を繰り出した。

「ショックエアクエイク!」

ピノツキモンは攻撃を受けて死にかけていた。

次回予告

「ピノツキモンが、死んだ。」

「ゴッドマグナスモンスーパーモード！ピノツキモンの仇を取って
！」

「左利、任してくれ！」

「次回第三十一話スーパーモード発動！退かせるゴッドマグナスモ
ン。」

「素晴らしい負の感情だ。」

「これはすごいことになりそうだ。」

第三十話 バグモンの罠！ピノックキモン最後の決断（後書き）

次回もまた見てね！

第三十一話 スーパーモード発動！退かせるゴッドマグナスモン

「ピノッキモン！ああ！」

死にかけているピノッキモンを見て、ショックフリートモンは嘲笑っていた。

「所詮、トランスフォーマー型デジモンに勝てるはずがない。消滅しろパペット型が！」

「なん・・・だと・・・究極・・・体同士が・・・戦っても・・・」

「ショックサウンドテラミックス！」

「E N E G O N e v o l u t i o n」

「マグナスモン進化、ゴッドマグナスモン！」

「お前・・・」

「あまりしゃべるな。ゴッドディアストーム！」

二つの技が相殺した。

「こやつ、究極体にしては強いだがショックウェーブモンの時とあまり変わっていない。」

ショックフリートモンは素早い動きでゴッドマグナスモンを翻弄した。

「くっ・・・小さくなった分、早くなったな。」

「当然だ。お前等の攻撃を避け損ねて死にかけたが転生進化したおかげでこんな姿になった。」

「もう一度食らわしてやる。大次!」

「ああ!」

「E N E G O N e v o l u t i o n」

「コンボモン進化、オプティマスプライモン!」

「S U P E R E N E G O N E V O L U T I O N」

「オプティマスプライモンスーパーモード!」

「シータキャノンフルバースト!」

「ふんっ!」

「なにっ!」

「ショックエアクエイク!」

オプティマスプライモンに命中した。

「もはや・・・ここまでだ・・・ショックフリートモン!ログネット
ブラスター!」

ピノッキモンの最後の攻撃がショックフリートモンの左肩に傷を付けた。

「がはっ！」

デジサイバトロンは衝撃の光景を見て固まった。

ピノッキモンをショックフリートモンの右腕が貫通していたのである。

「チェックメイトだな。」

ピノッキモン消滅。

左利は、一枚のエネルギーカードを持っていた。

「この場で、罪のないデジモンが消されるのはもったいねえだ！ゴッドマグナスモン蹴散らしましょう！」

「左利の強い気持ち、俺にもわかる。」

「行くよ！」

「SUPER ENERGY EVOLUTION」

「ゴッドマグナスモンスーパーモード！」

ゴッドマグナスモンスーパーモード 究極体 トランスフォーマー型 必殺技「スパイラルシーヴォックス」

「モードチェンジしたところでこの速度についてこれるか。」

ショックフリートモンのスピードが速すぎる。

「どうしよう動きが早すぎる。」

「左利、大丈夫だ俺に任して。行くぞ！はっ！」

ゴッドマグナスモンスーパーモードはショックフリートモンを捕まえた。

「放せ！」

「スパイラルシーヴオックス！」

「ぎゃややああああ！」

ショックフリートモンは、左足の一部と胸の一部の塗装がはがれて、天高く打ち上げられた。

「ピノッキモン、俺はどうすれば・・・」

「ロデイマスコンボモン、良かったらデジサイバトロンの仲間に入らないかい。」

「しかし・・・」

「俺達だって、ピノッキモンをこの場で失ったところは悲しい。でもな此処で涙を見ている場合じゃない。デジデストロンはデジタ

ルワールドの完全支配を企んでいる。しかもユニクロモンまで復活している。あまり時間は残されていないんだ。俺達デジサイバトロンは、デジタルワールドの危機を守るためにチームとして組んだ。ロデイマスコンボモンの戦力が加わればデジデストロンを蹴散らすスピードが速くなる。」

「そうだな。俺もこのままでは友達となったデジモン達が危ないと思うっている。よしっ、俺もデジサイバトロんだ。」

ロデイマスコンボモンの胸にデジサイバトロンのエンブレムがついた。

一方、ノイズメイズモンは・・・

「先ほどショックフリートモンが殺ったピノッキモンの負の感情を持ってまいりましたユニクロモン様。」

「おお、これは美味。ショックフリートモンを倒せない気持ちは格別だな。ハハハハハハハハハハ！」

ユニクロモンはいったい何者なのか・・・

次回予告

「ロードキングモン、少しばかりはわかってくれよ。」

「でもな鬼束・・・」

「近くにいるのはデジデストロンじゃないか。」

「サウンドウェーブモンと倒したはずの九大魔將軍。」

「次回、第三十二話復活した10人のデジデストロン。」

「これはすごいことになりそうだ。」

第三十一話 スーパーモード発動！退かせるゴッドマゲナスモン（後書き）

次回もまた見てね

第三十二話 復活した10人のデジデストロン

デジサイバトロン一行は、肌寒いところに来ていた。

ジャックは、あるものを見た。

「あの角は一体・・・」

「まさか、ユニクロモン。」

「あたりだ。デジサイバトロンの諸君。ただし褒美はない。」

「てめえーを倒すという褒美がある。」

「ハハハ。我等を倒すだと。冗談が良くて好きになつたぞ。少しだけ話し合いをしたいんだ。」

大次は、ユニクロモンの要望にこたえた。

「良いだろう。なんだ話というのは。」

「デジデストロンにはルーチェモンというデジモンがいる。お前達は知らないか。かつてデジタルワールドを破滅寸前にまで導いた魔王のときデジモン。そんなデジモンがメガトロモンの使いになっているって不思議に思わないか。」

「確かに、ルーチェモンってそんなに厄介な奴なのか。」

「ああ、七大魔王の一人でとてつもなくパワーがある。七大魔王が

全員デジデストロンに入ってなくてよかったな。七大魔王の中には選ばれし子供たちの味方になったりする者もいた。またある者は、実験台にされ人間と合体して人間界を暴れ回った奴もいる。この我等にも七大魔王に太刀打ちは手こずる。」

「なるほど。」

デジサイバトロンは歩きながら喋っていた。

「ユニクロモンって意外といい奴だったりして。」

「まあ、案外悪そうな奴じゃないみたいだし。」

「まるでスパイみたいなやつだったりして。」

「でも、デジデストロンと手を組んでいる。油断はできないし未知数の力を持っている。」

一方、ユニクロモンは・・・

「九大魔將軍、サウンドウェーブモン、リボーンリロード!」

復活の魔法陣が描き出され、そこから九大魔將軍とサウンドウェーブモンが現れた。

「ユニクロモン様!」

「どうしたノイズメイズモン。騒がしいぞ。」

「申し訳ございません。メガトロモンの計画会議に出席してくれと

報告がありました。」

「断ると伝えてくれ。」

「しかし・・・」

「いいか、我等を何奴だと思っているんだあのメガトロモンは。我等はアポカリモンが転生した姿。つまりユニクロモンなりだぞ！」

ノイズメイズモンは、デジデストロンからユニクロンの紋章に切り替えた。

「そうですね。我々はデジデストロンの言いなりにはならない。」

しかし、それを見ていたアイアントレッドモンがいた。

「これはスクープだ。」

デジサイバトロンは・・・

都会のような場所で休息を取っていた。

「すげえー、レース場まであるぜ！」

「一回、走ろうか。」

「良いぜ！デジタルトランスフォーム！」

コンボモンとマグナスモンとマッハアライトモンがレースロードではしゃいでいた。

「疲れを見せねえーなあいつら。」

「そうね。やっぱり血気がよすぎるところが原因なのかしら。」

「一位は、この俺だぜ!」

「一位は渡さない!」

大次と左利は、これほどないはしゃぎに少し呆れていた。

郎利は、ソニックモンと一緒に空を散策していた。

「やっぱり、空に飛んでいた方が一番。そうでしょソニックモン。」

「もちろんだよ。しかし、レース場ではしゃいでいる奴らも楽しそうだな。正直羨ましいぜ。」

「車に変形できないからねでも飛行機系に変形できるのも得だと思う。」

「それもそうだな。」

一方デジデストロンは・・・

「ユニクロモンの奴、裏切りよつただと。」

「それに奴等はエンプレムを自由に変えます。」

「どうしてそんなことに気付かなかったんだ。」

「ユニクロモンの状態は？」

「メガザラックモンそれがデジサイバトロンのエンブレムになっていました。」

「なんだと。」

「九大魔將軍も復活しています。サウンドウェーブモンも、おそらくユニクロモンの配下になっちゃったかも。」

「これは一大事だ。最強のシナリオを作りデジサイバトロンのユニクロモンを一齐にたたきつぶす。」

「面白い、やってみろ！」

「誰だ！」

「我の名は、アルゴルスモン。」

アルゴルスモン 魔人型 究極体 必殺技「ブルーエラーミッシェン」

デジデストロンのエンブレムになっている。

しかし突如としてデジサイバトロンの切り替わった。

「お前等を蹴散らしに来た。覚悟しろデジデストロン！」

九大魔將軍の一人、オボミナスモンも参加しに来た。

「このままでは・・・」

メガトロモンは、フォースチップを見ていた。

「よし、これを使う。」

「フォースチップイグニッション！ギフトオブダークネス！」

次回予告

「ユニクロモンのバグモン集団が来た。」

「九大魔將軍の一人、ダイナザウラーモンだ！」

「此処はジェットモンの出番だな。」

「ああ、俺達の力を見せる時だ。」

「次回第三十三話稲妻走る！ジェットファイアモンスーパーモード」

「此処で一気に決めてやる。」

「これはすごいことになりそうだ。」

第三十二話 復活した10人のデジデストロン（後書き）

次回もまた見てね。

第三十三話 稲妻走る！ジェットファイアモンスーパーモード

ギフトオブダークネスを食らったアルゴルスモン。

「ふふ、そんな技効かない！」

「アルゴルスモン、これならどうだ。ダークバーストシエルター！」

この攻撃はオボミナスモンが食い止めた。

「メガトロモン様、彼等デジサイバトロンです。」

「なにっ、裏切ったかオボミナスモン。」

オボミナスモンは、デジサイバトロンとデジデストロンに切り替えた。

「何を言っているんですかメガトロモン様。アルゴルスモン人質役を頼む。」

「分かった。デジサイバトロンのアルゴルスモンだ。」

「捕虜を捕まえたのか。オボミナスモンとあと復活おめでとう。」

メガトロモンはスノーストームモンとアイアントレッドモンからそのことを聞かされているが逆に利用しようと考えているようだ。

アルゴルスモンとオボミナスモンは、ニヤリとしていた。

一方、デジサイバトロンは……

都会の町を満喫していた。

「大次、もう少しいようぜ。」

「デジデストロンの気配を感じる。」

突然、江利彦がデジデストロンの気配に気がつきはじめた。

「デジデストロン。」

「行ってみよう。」

「君達は満喫してくれ。俺はジェットモンと一緒に行く。」

「分かった。」

デジデストロンの気配が分かった。

「ダイナザウラーモン。」

ジェットモンはバグモンを見ていた。

「江利彦、進化させてくれ。」「よしっ！」

「ENERGON EVOLUTION」

「ジェットモン進化、ジェットファイアモン！」

ダイナザウラーモンは、ジェットファイアモンを見ていた。

「ダイナソーキャノンテラーセット!」

「サンマインドレーザー!」

二つの技は相殺したが・・・

「ミニブレイクビーム!」

バグモン達の攻撃をジェットファイアモンが食らった。

「くつ、身動きが取れない。」

「今だ。ファイナリストティラノブラスター!」

「ぬわああ!」

「ジェットファイアモン! なくなるうえは・・・」

デジヴァイスアトランティスにもう一枚のエネルギーカードをさし込んだ江利彦。

「SUPER ENERGY EVOLUTION」

「ジェットファイアモンスーパーモード!」

「スーパーモード、それがどうした! バグモンたちよやれ!」

「行くぞー、ミニブレイクビーム!」

ジェットファイアモンスーパーモードはその攻撃を見事にかいくぐった。

「サンダーロードスパークメテオ！」

バグモン達は悲鳴を上げて消滅した。

ダイナザウラーモンが次の一手に踏み切ろうとしたが、ジェットファイアモンスーパーモードに上空高く舞いあげられた。

「お前、放せ！」

「サンダーロードインパクトバースト！」

一気に地上に落下して大爆発した。

ダイナザウラーモン消滅。

江利彦とジェットファイアモンスーパーモードはビクトリーポーズを付けていた。

次回予告

「ロードキングモン、行くぞ！」

「自分は、ブレイクドラモンを倒したい。」

「しかし奴は危険なデジモンだぞ。」

「分かっているからこそ戦えるのです。」

「次回第三十四話最強の馬力のスーパーモード。」

「これはすごいことになりそうだ。」

第三十三話 稲妻走る！ジェットファイアモンスーパーモード（後書き）

次回もまた見てね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6470n/>

デジモントランスフォーマーズ

2011年11月17日21時24分発行